

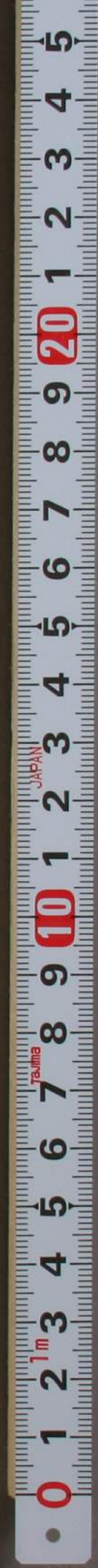
人祖論

神津専三郎譯

第二卷

和装本

= 13  
2250  
3





二 13  
2250  
3



人祖論卷之二目錄

卷之二

第二編 人類ノ獸類ヨリ遞進セシ方法ヲ論

ズ

○人心及び人體ノ變化スル所以ヲ論ズ

遺傳ヲ論ズ

變化ノ原由ヲ論ズ

身體ノ變化スル規則ハ人獸ニ於テ異ナル

トコロナキ所以ヲ論ズ

○境遇變革ノ直接分明ナル影響ヲ論ズ

昭和九年  
三月一日  
十日野  
長男  
氏



- 體部ノ使用増減セル成果ヲ論ズ
- 暢發ノ停住ヲ論ズ
- 復古造構ヲ論ズ
- 連發變化ヲ論ズ
- 偶然變化ヲ論ズ
- 人口増殖ノ度ヲ論ズ
- 附人口増殖ノ妨害ヲ論ズ
- 天然撰擇ヲ論ズ
- 人類ノ萬物ニ靈タル所以ヲ論ズ
- 人體造構ノ妙用ヲ論ズ

- 人體ノ直立セシ原由ヲ論ズ
- 人體ノ直立セシヨリ生ゼシ變化ヲ論ズ
- 牙ノ衰微セシ所以ヲ論ズ
- 頭顱ノ大ヲ増シ形ヲ變ゼシ所以ヲ論ズ
- 人類ノ赤身ナル所以ヲ論ズ
- 人類ノ尾ヲ失セシ所以ヲ論ズ
- 天撰ノ境域ハ未ダ遽カニ定ムベカラザル所以ヲ論ズ
- 天然撰擇以下ヲ結論ズ
- 人身ノ守ナク助ナキ情態ヲ論ズ



人祖論卷之二目錄終

人祖論卷之二

英國 查爾斯駝韻著  
日本 神津專三郎譯

第二編 人類ノ獸類ヨリ遞進セシ方法ヲ論

人心及ビ人體ノ變化スル所以ヲ論ズ  
諸人類ノ心身ノ變化シテサレニ一定セザルハ  
太ダ明カナリタトヒ同種ノ人種ニ屬スル者ト  
雖モ二人同ナル者未ダ曾テ之アラズ百万人



○千八百六十九年印行、額德氏昧兵統計表、第五百五十六葉、  
 ○千八百六十八年印行、費拉特、費格物學社報告、中、學士、埃土、兀、美、額、亞、米、利、加、土、人、頭、形、論、  
 論、渡、洲、人、ニ、就、テ、ハ、千、八、百、六、十、三、年、印、行、雷、以、爾、人、類、古、蹟、考、第、八、十、七、葉、  
 哈、屈、禮、ノ、論、山、德、維、知、人、ニ、係、

ノ。面。ハ。ナ。ホ。百。万。種。ニ。ノ、一。モ。異。ナ。ラ。ザ。ル。ハ。ナ。シ。  
 身。體。諸。部。ノ。大。小。長。短。モ。マ。タ。然。リ、脛。脚。最。モ。常。ニ  
 長。短。ア。リ。○。頭。形。モ。通。例。全。世。界。ノ。中。一。地。方。ニ。於  
 テ。ハ。ヤ、長。大。ナル。ア。リ、一。地。方。ニ。於。テ。ハ。ヤ、短  
 小。ナル。ア。リ、然。レ。更。ニ。子。細。ノ。形。狀。ニ。至。リ。テ。ハ、亞  
 米。利。加。及。ビ。南。部。濠。斯。土。刺。利。亞。ノ。土。人、マ。タ。ハ。山  
 德。維。知。ノ。如。キ。狹。小。ナル。一。島。地。ニ。生。活。ス。ル。人。種  
 ノ。中。ニ。於。テ。モ、千。變。万。化。極。リ。ナ。シ。○。有。名。ナル。齒  
 醫。ニ。據。レ。バ、齒。牙。ノ。變。化。ア。ル。ナ。ホ。容。貌。ニ。於。ケ。ル  
 ガ。ゴ。ト。シ、大。動。脈。マ。タ。數。歪。道。ヲ。循。環。ス。ル。ア。リ、故

リ。テ。ハ。千。八。百。六。十。三。年。印。行、波。斯。  
 六。十。八。年。波。斯。  
 鞞。印。行、博。士、准。滿。頭。殼。論、第。十。八。葉。ヲ。見。ヨ、  
 ○。千。八。百。四。十。四。年。印。行、屈。印。動。脈。解。剖。論、序。文。ヲ。見。ヨ、  
 ○。壹。丁。不。學。士。會。院。雜。誌。第。二。十。四。卷。第。百。七。十。五。第。百。八。十。九。葉。ヲ。見。ヨ、  
 ○。千。八。百。六。十。七。年。印。行、學。士。會。院。報。告。第。五。

ニ。外。科。學。ニ。關。シ。血。液。循。環。ノ。正。非。ヲ。判。セ。ン。ト。欲  
 ス。レ。バ、則。チ。人。體。一。千。零。四。十。餘。ヲ。檢。察。シ、以。テ。之  
 ヲ。校。計。セ。ザ。ル。ヲ。得。ズ。ト。イ。フ。○。筋。ノ。變。化。ア。ル。同  
 シ。ク。非。常。ナ。リ、博。士。土。耳。拿。○。嘗。テ。足。筋。ヲ。檢。察。セ  
 シ。ニ、五。十。人。中。其。同。一。ナル。モ。ノ。二。人。ヲ。得。ル。一。難  
 ク。動。モ。ス。レ。バ。變。化。ノ。度。甚。ダ。シ。キ。モ。ノ。ア。リ。且。其  
 運。轉。勢。力。モ。マ。タ。自。カ。ラ。其。變。化。ノ。度。ニ。隨。ヘ。リ、烏  
 德。氏。曰。ク。○。三。十。六。人。ニ。二。百。九。十。五。筋。ノ。變。化。ア  
 リ、マ。タ。同。數。ノ。人。ニ。ノ。體。ノ。兩。脇。ニ。於。ケ。ル。モ。ノ。ヲ  
 以。テ。計。シ。テ。之。ヲ。一。ト。ナ。シ、ナ。ホ。其。變。化。五。百。五。十



百四十四葉同  
六十八年印行  
第四百八十三  
第五百廿四葉  
一タ是ヨリ先  
二千八百六十  
六年印行第二  
百廿九葉ニモ  
已ニ之ヲ論ゼ  
リ  
⑤千八百六十  
八年印行愛爾  
蘭學術院報告  
第四百一十一葉  
⑥千七百七十  
八年印行聖彼  
得堡學術院報

八餘ノ大數ニ至リシモアリ、更ニ三十六人ハ、通  
常校用解剖論ニ説明スル筋ノ定規ニ戾ラザル  
モノ實ニ一人モ之ナク却テ其變化ノ非常ナル  
モノナリ、或ハ一人ニ其數二十有餘ノ多キア  
リ、或ハ同筋ニ其變化ノ數様ナルアリト、博士  
麥嘉理斯得ハ⑥蹠筋ノ附屬筋ニ二十餘種ノ變  
化アリトイヘリ、  
解剖學ノ老手烏耳布曰ク⑦臟腑ハ變化アルハ  
却テ外部ニ勝リ、人同シカラザレバ、一小部分ト  
雖モ、幾何かミナ其情狀ヲ異ニセザルハナシト、

告第二號第二  
百十七葉

マク書ヲ著シテ臟腑ヲ圖解シ以テ此說ヲ更張  
セリ、但シ其肝肺腎諸臟ニ係ル想像論ハ、恰カモ  
人面ヲ以テ神顔ニ肖タリトスル如ク、其音吾人  
ノ耳ニ觸レテ頗ル奇異ナルヲ覺ヘシム、  
人種同シカラズノ其才能ヲ異ニスルハ、固ヨ  
リ之ヲ問ハザルモ、今其人種ヲ同ウシテ、而シテ  
ホ且其才能ノ變化アルハ、論ヲ埃タズノ明カナ  
リ、獸類マタ然リ、其證確乎トノ據ルベキアリ、犬  
馬牛羊ノ如キニ至リテハ、世人自カラ之ヲ知レ  
リ、貌廉嘗テ猿類ヲ亞弗利加ニ養馴セシニ各才



○貌廉動物略  
傳第一卷第五  
十八第八十七  
節蓮芽巴羅圭  
哺乳類論第五  
十七節  
○養馴動植變  
進論第二卷第  
十二章

智性情ヲ異ニセリ、一大猴ノ秀才ナルハ、屢人ヲ  
驚カシメシモアリト、生物園ノ監者一日余ニ示  
シタルハ、新世界部類ニ屬スル猿類ナリシガ、其  
智力均シク衆ニ抽ンデシモノナリキ、蓮芽マタ  
猿類ヲ巴羅圭ニ養ヒシニ、同種類ニノナホ其心  
性一モ異ナラザルハナカリシトナリ、斯ル變化  
ハ或ハ遺傳ニ出デ、或ハ其教養ノ方法ニ由テ以  
テ然ルヲ致セシモノナリトイフハ、  
遺傳ヲ論ス  
余嘗テ本旨ニ係リ講究スル所アリ、<sup>九</sup>更ニ此ニ

○千八百六十  
九年印行遺傳  
才能

及ブラ要セス、小大輕重ノ遺傳殆ンド之ヲ悉セ  
リ、就テ觀ルベシ、其例ミナ獸類ニ於テ類似スル  
モノアリト雖モ、殊ニ人類ニ於テ發見スル所ナ  
リ、夫ノ犬馬牛羊ノ如キ、其性質ヲ遺傳スルハ最  
モ尋常ニシ、好嗜及ビ習慣ハイフモ故ナリ、心意  
ニ涉ルモノト雖モ、マタ之ヲ遺傳シ、或ハ才能ヲ  
傳ヘ、或ハ勇氣ヲ留メ、或ハ善不善ノ性情ヲ遺ス  
アリ、人類マタ均シク之ヲ遺傳シ、家トシテ其  
證アラザルハナシ、蓋シ之ヲ牙耳東氏ノ著書○  
ニ徵スルニ、卓越高尚ノ才能ヨク祖遺ニ係リ、狂

且論

四



痴魯鈍ノ性屢血脈ヲ傳留セリ、

變化ノ原由ヲ論ズ

人類ノ心身ニ變化ヲ致ス所以ノ原由ハ、未ダ之  
ヲ詳ニセズト雖モ、變化ノ原由ハ人類ニ於ケル  
ハナホ獸類ニ於ケルガ如ク、必ズヤ其世々經歷  
セル境遇ニ由ルト明カナリ、然リ而シテ諸人種ニ  
於テ變化ノ多端ナルハ、マタ家生動物ニ符合ス  
ル所アリ、家生動物ハ之ヲ野生動物ニ比スルニ  
其變化サラニ多シ、是レ即チ世々經歷スル境遇  
ハ極リナキ所以ナリ、縦ヒ一箇ノ人種ニ屬スル

モト雖モ、亞米利加人種ノ如ク廣大ナル地方  
ニ散居スル片ハ、各自ノ者ニ於テ變化ノ多端ナ  
ルモ亦然リトス、人類愈々開進スレバ、其境遇ハ影  
響ヲ受ケルト愈々増加セリ、何ニトナレバ、其社會  
ニ在テ品位ヲ異ニシ、職分ヲ同ウセザル者ハ各  
ミナ變化ヲ異ニシ、其多端ナルハ遠ク未開人民  
ノ及バザル所ナレバナリ、然リト雖モ或ハ屢臆  
想ニ失シ蠻民ヲ以テ全ク一定ナリトスル者ア  
リ、是レ大ニ謬テリ、其實動モスレバ却テ一定ノ  
造構ナシ、而シテ今姑ク經歷ノ境遇ニノミ就

白逸氏南亞  
米利加ノ土人  
ニ係ル説アリ  
千八百六十三年  
西曆河傳  
物記第二卷第  
百五十九葉



◎貌拉孟拔人  
類論英譯十八  
百六十五年印  
行第二百五葉  
ヲ見ヨ

テ之ヲ推究スル所、獨リ人類ヲ以テ生物中最モ  
馴化セシ者ナリトスルハ、<sup>③</sup>マタ太ダシキ失見  
トイフベシ、其故何ソヤ、蓋シ濠洲人種ノ如キ野  
蠻ノ人民中、其經歷スル境遇褊小ニメ、却テ闊大  
ナル地方ニ在テ境遇百端ヲ經歷スル動物ニ如  
カザル者アレバナリ、然リト雖モ更ニ重大ナル  
事件ニ就テハ何如ニ養馴化育セル動物ト雖モ  
決シ人類ニ及バザル所以ノモノアリ、抑人類ハ  
生殖上至大ノ自由ヲ享有セリ、故ニ一種一族ハ  
リ、<sup>④</sup>累代規則ハ束縛ヲ受ケ、又ハ不意ニ撰擇セ

ラレ、主人ハ爲ニ其特質ヲ保留スルニ至リシ如  
キ強迫ニ屬セシ者未ダ曾テ之アラズ、マタ彼ノ  
有名ナル普魯細亞ノ壯士隊ヲ除キテハ、古來某  
ノ男女ヲ特撰シ以テ之ヲ強配セシメシトナシ、  
此兵隊ハ獨リ法度ヲ以テ合格ナル男女ヲ配偶  
セシメタリ、是レ所謂人類ノ撰擇ニ屬セシ一例  
ナリ、何ニトナレバ其村落ヨリ高長偉大ナル者  
輩出セシヲ以テナリ、マタ士巴耳太ニ於テ之ニ  
等シキ撰擇ノ制度アリ、小兒出産ノ後直チニ之  
ヲ檢察シ、體格善良ニシテ精神活潑ナルモノハ採



密的福土希臘史第二百八十二葉ヲ見ヨ

テ之ヲ養育シ然ラザル者ハ棄テ之ヲ灰凶ニ屬セシメシトイフ

凡ソ男子タル者其妻ヲ選グニ方テマヅ第一ニ子孫ノ健

身體ノ變化スル規則ハ人獸ニ於テ異ナルトコロナキ所以ヲ論ズ

例ヘバ人類ノ總種ヲ以テ一種ノ生物ト看做サ

康ト智勇トニ著眼スベキハ

抑希臘普通ノ傳説ナリシマタ設説本記第二卷第四葉ニ明カナリ○且設阿尼士ハ紀元前五百五十年ノ頃名ヲ得シ希臘ノ詩人ナルガ既ニ男女相撰ノ真ニ行ハレナバ人生無窮ノ福祉ヲ與フベキ所以ヲ明認セリ然レバ此相撰ハ數金銀ノ爲ニ行ハレザレバ深ク之ヲ憂ヘタリ其詩ニ曰ク

買牛買馬皆由例規撰種擇類未問財貴善良是採不良是擻謀利謀益亦謀繁昌  
人生配偶獨在錢價男爲之娶女爲之嫁日愚曰惡有福有祿能生子孫配彼門族  
無貴無賤混爲一群敗風壞俗惟可驚君請君莫驚其因分明徒憂結果豈能所成

二十八百七十二年刊行夫里耳譯述第二卷第三百三十四葉譯者曰ク余未ダ詩歌ヲ學ハズ況ンヤ之ヲ譯スルオヤ然レバ安リニ之ヲ詩句ニ擬フハ蓋シ本書譯述上止ヲ得ザルニ出デタ

リ其體裁ノ如キハ真ノ直譯ニメ固ヨリ觀ルニ足ラズ大方ノ君子幸ニ笑フナカレ  
九年印行吳德倫生物論第二卷第三章及ビ千八百六十年印行客得非地人類推原并ニ千八百六十六年ヨリ同六十八年ニ至ル學術雜誌中ノ

バ其種固ヨリ大ナリト雖モ亞米利加種葡萄耳納細亞種等ノ如キ各自ノ人種モマタ之ヲ大ナリトイハザルヲ得ズ抑生物ノ大族ハ之ヲ小族ニ比スレバ其變化モ隨テ大ナルハ確乎不拔ノ定則ナリ而メ人類ノ變化ハ養馴動物ノ如キ際限アルモノノ變化ニ類似スルヨリ寧ロ非常ニ大族ナル動物ノ變化ニ符合スルトコロアリ  
夫ハ變化ハ生ズルヤ人獸ニ類トモニ其原由ヲ同カスルハミナラズナホニ類等シク之ヲ身體ノ同部ニ致シ其體裁モマタ之ヲ同ウセリ吳德



人類論ヲ見ヨ  
千八百三十  
二年印行不正  
造構論第一卷

倫客得非地ノ二氏之ヲ論ジ頗ル餘蘊ナシ  
敢テコ、ニ贅セズ變化ノ始メ大ニ後漸ヤク  
小ナルニ至ルアリ是レマタ人獸其情ヲ一ニセ  
リ故ニ嘗テ以西德饒弗禮仙費禮亞ノ論ズル如  
ク⑤之ヲ同部類ニ屬シ之ニ同名ヲ下シテ可ナ  
リ向ニ余ガ撰述セシ養馴動植變進論ニ條陳シ  
タル變化ノ規則ハ大略左ノ如シ  
境遇變革ハ直接分明ナル影響ハ同一ハ事情ヨ  
リ同一ハ變化ヲ盡ク同一ハ生物ニ致スベシ  
體部ハ使用増減スレバ必ズ本部ニ其結果ヲ生

ズベシ  
同部ハ分子相凝聚スルハ其兩部必ズ粘著合  
一スベシ例ヘバ二頭粘著シテ一頭二面トナリ  
又ハ二背合一シテ一體八肢トナリシ怪物ノ生  
ズルガ如シ  
多數ヨリ成立スル機關又ハ部分ハ容易ニ變化  
スベシ所謂多數ヨリ成立スル機關又ハ部分ト  
ハ齒牙指趾若クハ草木花ハ雄藥雌藥等ノ如キ  
者是ナリ  
身體ノ一部分衰微スレバ成長上ノ應報ニ由テ



他ノ一部分暢發シ、或ハ其一部分特ニ暢發スレ  
 バ、他ノ部分爲ニ衰微スベシ、  
 甲部ハ乙部ヲ壓抑スルホハ、乙部輒チ變ズヘシ、  
 例ヘバ未ダ子宮中ニ在ル小兒ノ尻骨盤ノ頭顱  
 ヲ壓抑セシ成果ノ如シ、  
 一部ハ暢發全ク停住スレバ、本部遂ニ衰滅スベ  
 シ、  
 體部ハ造構復古スレバ、既凶造構ヲ再興スベシ  
 彼此ハ部分暗ニ連絡ヲ通ズル所ナレバ、其變化  
 必ズ連發スベシ、

◎本旨ハ既ニ  
 養馴動植變進  
 論第二卷第二  
 十二第二十三  
 章ニ詳悉セリ、  
 ◎千八百六十  
 八年、孟蘭氏中  
 際感化論ノ著  
 アリ、其植物ニ  
 係ルヤ切ニ土  
 質ノ功用ヲ論  
 セリ、

以上ニ舉ル規則ハ人類及ビ獸類ニ通用スルモ  
 ノニメ、其中多クハナホ植物ニモ適スベキモノ  
 アリ、今一々之ヲ討論スルハ殆ンド徒勞ニ屬セ  
 リ、故ニ就中要旨ノ數項ヲ撮摘シテ、逐次ニ之ヲ  
 講究セント欲ス、  
 境遇變革ノ直接分明ナル影響ヲ論ズ  
 夫レ本旨ハ至難ノ問題ナリ、然レモ生物ノ境遇  
 ノ變革スル片ハ其影響ノ必ズ之ニ及ブヤ毫モ  
 疑ナシ、意フニ十分ノ星霜ヲ經バ、果シテ其爾ル  
 ヲ目撃スルニ至ルベシ、惜ラクハ余未ダ其適證

且論 卷二 九



⑤千八百六十  
 九年印行、額德  
 兵統計表第  
 九十三、第百零  
 七、第百廿六、第  
 百三十一、第百  
 三十四葉、見、

ヲ得ザルヲ、抑生物ノ體部造構ハ其數殆ンド極  
 リナク、而ノ其用各歸スル所アリ、宜ナル乎夫ノ  
 反對論者ガ之ヲ以テ境遇變革ノ影響トセズ、一  
 向特殊創造ニ係ルノ所以ナリトスルヤ、然レモ  
 生物ハ境遇ハ之ガ模型ニハ其變革ニ由テ生ズ  
 ル影響ハ千趣萬態サラニ極リナシ、  
 嚮ニ合衆國南北ノ役ニ服事セシ兵卒一百万餘  
 人ノ身體大小及ビ出生ノ州部ヲモ檢察シテ子  
 細ニ之ヲ記録セルモノアリ、⑥此ノ如キ非常ナ  
 ル大數ノ檢察ニ就テ之ヲ考フレバ、昭々トメ各

地ニ固有ハ原由アリ、以テ身體大小ハ差異ヲ致  
 セリ、加之出産ノ州部ニハ父祖ハ遺傳アリ、其後  
 成長ノ州部ニハ新受ハ感觸アリ、ミナ以テ身體  
 大小ニミルベキ影響ヲ與ヘタリ、例ヘバ東部ノ  
 地方ニ出産シ、而ノ身體成長ノ年代ニ方テ西部  
 ノ州土ニ移住セシ者ハ、其身體ヤ、大ナルヲ致  
 セリ、之ニ反シテ水夫ノ如キ生計ヲ營ム者ハ、其  
 身體ヤ、小ナルニ至レリ、何ニトナレバ其齡十  
 七八歳ニ及ブ兵卒ト水夫トヲ比較スルニ、其異  
 ナル甚ダシ、額德氏嘗テ此原由ヲ推シ、以テ身長



⑤葡耳納細亞  
人ニ係リテハ  
千八百四十七  
年印行、普理加  
德人體治華史

ニ影響ヲ生ズル所以ヲ究察セシガ、到底反對ノ  
説ニ決シ、此原由ハ敢テ氣候ハ寒暖、土地ハ高低  
及ビ生活ハ安窮ノ與カラザル者トセリ、然レモ  
終リノ箇條ニイヘル生活ハ安窮ハ與カラザル  
云云ノ論ハ、佛蘭西ノ諸部ニ於テ徵兵ノ身體ヲ  
檢査シタル統計表ニ據ル未耳美ノ説ニ反セリ、  
マタ之ヲ比較スルニ、或ハ葡耳納細亞ノ酋長ト  
同島下等ノ蠻民トヲ以テシ、或ハ同洋ニ屬スル  
噴火島ノ生蕃ト低濕ニノ荒漠ナル珊瑚島ノ野  
人トヲ以テシ、<sup>⑥</sup>或ハ非地ノ彼此生資ヲ異ニス

第四百五十五第  
二百八十三葉  
及ビ吳德倫生  
物論第二卷第  
二百八十九葉  
ヲ見ヨ○巖地  
上流沿岸及ビ  
便加爾ニ住ス  
ル殆ンド同種  
ノ印度人ニ容  
貌ノ非常ナル  
不同アリ、義耳  
賓斯東印度史  
第一卷第百  
廿四葉ヲ見ヨ、

ル東岸ノ住人ト西岸ノ居民トヲ以テスルニ、何  
レモ善良ナル食物ト生路ノ安樂ナルトハ、必ズ  
身長ニ影響ヲ生ズル、其理太ダ分明ナリ、然リ  
ト雖モ、此論旨ニ係リ是非ヲ決スルノ難キハ、已  
ニ上述スル如ク、諸家ノ説ノ區區ニメ合ハザル  
ヲ以テモ推テ知ルベシ、學士伯堂近來論ズル所  
ニ據レバ、英國人民ノ都府ニ住スル者ト或ル種  
類ノ職業ヲ務ムル者トハ、體長ヲ縮セシムル  
ノ患アリ、而メ此成果ハ動モスレバ遺傳セリ、合  
衆國ト雖モマタ然リ、且身體ノ暢發最高ノ度ニ



⑤千八百六十  
 七年ヨリ同六  
 十九年ニ至ル  
 人類學社記録  
 第三卷第五百  
 六十一、第五百  
 六十五、第五百  
 六十七葉、  
 ⑥千八百六十  
 九年六月十九  
 日及ビ七月十  
 七日印行、醫學  
 新聞中、學士伯  
 拉堅、律、日病根  
 論ヲ見ヨ、

達スルキハ、其精力智能モマタ均シク最高ノ位  
 地ニ達セリトイフ⑤、  
 更ニ直接ノ影響ヲ人類ニ生ズルノ外因アリヤ  
 否ヤハ未ダ之ヲ審カニセズ、然リト雖モ、肺ト腎  
 トハ寒冷ニ方テ其活力ヲ増シ、肝ト膚トハ温熱  
 ニ際シ其強壯ヲ致スガ如ク、季候ハ變化ノ影響  
 ヲ生ズルハ確乎トハ憑ルベキアリ⑥、蓋シ往時  
 ハ膚色ト毛髮トハ、或ハ日光或ハ日熱ニ因ルモ  
 ノトセリ、然レデ此等ノ原由ヨリ膚色ト毛髮ト  
 ニ或ハ影響ヲ生ゼザルニ非ルモ、方今諸學者ノ

説ノ歸スル所ハ、烈日ニ曝露スルコト縦ヒ數世ニ  
 彌ルト雖モ、其影響ノ及ブヤ殊ニ甚シトス、ナホ  
 此論題ニ係ル議論ハ、後編ニ於テ種々ノ人種ヲ  
 論ズル條下ニ就テ、更ニ之ヲ詳カニスベシ、惟フ  
 ニ家生動物ニ在テハ、氣候ハ寒熱ハ、毛髮ハ生長  
 ニ影響ヲ生ズルト其證ナシトセズ、然レデ其人  
 類ニ關スル者ハ未ダ之ヲ得ザルナリ、  
 體部ノ使用ハ、使用増減セル成果ヲ論ズ  
 體部ノ使用ハ、筋肉ヲメ強剛ナラシメ、不使用若  
 クハ一神系ノ廢滅ハ之ヲメ柔弱ナラシメリ、是



③養馴動植變  
進論第二卷第  
二百九十七葉  
ヨリ第三百葉  
ニ至リ諸家ノ  
説及ビ義寧進  
新報第五卷第  
一篇中日牙氏  
骨長論ヲ見ヨ

④千八百六十  
九年印行額德  
統計表第二百  
八十八葉

故ニ眼目ヲ傷レバ、屢視神系ヲ衰凶シ、動脈管ヲ  
結埋スレバ、其屬管ヲメ大ナラシメ、且之ヲ被覆  
スル衣膜ハ厚サヲ増シ勢ヒヲ加フ、腎臟ハ一方  
病ハ爲ニ活用ヲ失スレバ、他ハ一方其大ヲ増シ  
二方ハ職務ヲ兼理ス、重荷ヲ運送スル者ハ獨リ  
其骨骼ヲ大ナラシムルハミナラズ、ナホ其長ヲ  
加ヘリ、③其他家業ヲ異ニスル者ハミナ身體ノ  
大小長短ヲ異ニセリ、嘗テ合衆國政府ニ於テ調  
査セシ所ニ據ルニ③往年南北ノ役ニ服事セシ  
水夫ハ、平均シテ其身體ヤ、短小ナレバ、脛ハ兵

卒ヨリ長キ一英寸ノ〇・二一七ニノ、其臂ハ却  
テ之ニ及バザル一英寸及ビ〇・〇九ナリ、然レ  
バ體長ノ少シク長キヲ以テ臂ノ甚ダ短カキニ  
比スレバ、拉多補少シテ水夫ハ到底短カキ者ニ  
テアリキ、夫レ此ノ如ク臂長ノ短カキヲ致セシ  
所以ハ、水夫ノ多ク之ヲ使用スルヲ以テ然ルニ  
似タリ、實ニ此成果ハ意外ニ出デタリトイフベ  
シ、但シ水夫ノ腕臂ヲ使用スルハ、重物ヲ彼ヨリ  
我ニ引クニアリ、而メ之ヲ下ヨリ上ニ揚クル  
ナシ、マタ水夫ノ頸ノ周圍及ビ脚背ハ兵卒ヨリ

且論 卷二 十三



千八百三十  
年印行巴羅  
哺乳類論第四  
節

甚ダ大ナリ、然レド其胸膈腰腿ニ至リテハ遠ク  
之ニ及バザリシ者ナリ、  
若シ世々家業ヲ同ウセバ、以上ニ論ズル變形ノ  
如キ必ズ遺傳スベキヤ如何ハ得テ之ヲ明言ス  
ベカラズト雖モ、マタ敢テ其理ナシトセズ、蓮芽  
ハ亞米利加ノ土人白亞牙種族ノ瘠脛肥腕ナ  
ルヲ以テ、累代其生ヲ木舟ニ送り、獨リ腕カヲ使  
用シ、而シテ脛ヲバ廢シテ之ヲ使用セザル所以ニ  
歸セリ、外ニマタ之ニ類似スル例ニ於テ、其論ノ  
結局ヲ同ウスルモノアリ、格蘭圖トイヘルハ多

千七百六十  
七年印行、英譯  
額林蘭史第一  
卷第二百三十  
葉

千八百三十  
八年印行、西歷  
山、大、高、加、異、邦  
同配論第三百  
七十七葉ヲ見

年義斯基蒙人ノ中ニ居留セシ人ナルガ、其説ニ  
據レバ、<sup>(四)</sup>此蠻民ハ其最高ノ技能トスル海狗ノ  
獵ニ長シ、其技ニ巧妙ナルハ、之ヲ遺傳ニ歸セリ、  
是レ深キ故アリ、何ニトナレバ有名ナル海狗獵  
師ハ子ハ或ハナホ幼ニシテ其父ヲ喪フモ、必ズマ  
タ此技ニ抽ンズレバナリ、此ハ如キハ、帝ニ身體  
造構ハミナラズ、ナホ智能モ共ニ之ヲ遺傳セシ  
モハナリトイフ、マタ英國ニ於テ傭工ハ手ハ之  
ヲ縉紳ニ比スルニ生レナガラ、ニハ既ニ肥大ナ  
リ、<sup>(五)</sup>而シテ四肢ト顯頬トハ相關係スルモノニテ

且論卷二  
十四



⑤養馴動植變  
 進論第一卷第  
 七十三葉ヲ見  
 ヲ  
 ⑥活理學第一  
 卷第四百五十  
 五葉  
 ⑦千八百五十  
 三年印行、巴  
 的、外科論第  
 卷第二百九十  
 葉ヲ見ヨ

屢連發ノ變化ヲ受クルアリ、手足ヲ以テ勞作セ、  
 ザル者ハ其顛頰殊ニ薄弱ナリ、故ニ文化ノ人  
 民ハ之ヲ以テ遙カニ蠻民及ビ傭工ノ下ニ出ヅ、  
 是レ華巴的、士平薩ノイヘル如ク、③蠻野ノ人民  
 ハ粗大未烹ハ食物ヲ食シ、以テ多ク顛頰ヲ使用  
 シ、遂ニ其影響ヲ嚙嚼筋骨ニ生シタル所以ナリ、  
 マタ胎兒未ダ分娩セザルノ日ニ在テ、身體諸部  
 ノ中既ニ跣皮最モ堅硬ナルガ如キハ、④所謂世  
 カ重歴シタル成果ハ遺傳ニ出ル著明ナルモノ  
 トイフベシ、

⑧水夫ノ遠見  
 距離ハ概シテ  
 陸住ノ者ニ劣  
 レルハ甚ダ奇  
 ナリ、額德氏千  
 八百六十九年  
 印行南北戰爭  
 衛生始末第五  
 百三十葉ニ據  
 レバ、水夫ノ通  
 例近眼ナルハ  
 其眼界船ノ長  
 サト楫ノ高サ  
 トニ限レル所  
 以ナリトイフ、  
 ⑨養馴動植變  
 進論第一卷第

時計師、刊刻師等ノ中ニ近眼ナル者アリ、マタ生  
 計ヲ戶外ニ送ル者及ビ蠻野ノ人民ニ特ニ遠眼  
 ナル者多シ、①是レ普子ク諸人ノ知ル所ナリ、然  
 ノ近眼遠眼ハ概スルニ皆遺傳ニ屬セリ、②、叢、蠻  
 野ノ人民ヲ以テ之ヲ考フルニ、視官及ビ其他ノ  
 諸官能ニ於テ、歐洲人ノ下劣ナルハ世々之ヲ不  
 使用ニ屬セシ結果ハ遺傳ナルヲ疑ナシ、嘗テ白  
 人ニモ亞米利加ノ土人中ニ成長シ、マタ其生涯  
 モ之ト共ニ送リシ者アリ、蓮芽③適マ之ヲ觀タ  
 ルニ、其人決シテ土人ノ如キ銳利ナル五官ヲ備

且論 卷二 十五



八葉ヲ見ヨ、  
 ③巴羅圭喃乳  
 類論第八第九  
 節及ビ千八百  
 二十二年印行  
 羅連士生理論  
 第四百四葉ヲ  
 參見セヨ、○地  
 郎德去倫近眼  
 ノ原由ハ其人  
 ノ職業ニ在ル  
 諸證ヲ檢出セ  
 リ千八百七十  
 年印行學術雜  
 誌第六百二十  
 五葉

ヘザリシトナリ、且此博物學者ノ説ニ、頭顱ノ中  
 ニ五官ノ機關ヲ統理スル部門アリ、此部門亞米  
 利加ノ土人ニ於テハ大ナルト迫カニ白人ニ超  
 越ストイヘリ、然レバ則チ此諸機關モマタ必ズ  
 強大ナルハ疑ヲ容レズ、貌拉孟拔ノ如キハ、現ニ  
 亞米利加ノ土人ハ頭顱ノ中ニ在テ臭官ヲ統理  
 スル部門ノ頗ル大ニメ、其官能モ隨テ強大ナル  
 ヲ有セリトス、巴拉士ニ據レバ、亞細亞北部ノ平  
 原ニ住ム蒙古人種ニ於テ五官ノ健捷ナルモマ  
 タ驚クニ堪ヘタリ、普理加徳ハ頭顱ノ幅大ニメ

④普理加徳人  
 體沿革史ヲ見  
 ヲ貌拉孟拔ノ  
 説ハ千八百五  
 十一年刊行第  
 一卷第三百十  
 一葉巴拉士ノ  
 説ハ千八百四  
 十四年刊行第  
 四卷第四百七  
 葉ニアリ、  
 ⑤同上第五卷  
 第四百六十三  
 葉ノ引用ニ據  
 ル

額骨ヲ蓋フニ至ルハ其五官ノ十分ニ暢發セル  
 所以ナリトイヘリ③、  
 客衆亞種族トイヘルハ秘魯ノ高原ニ住ム野人  
 ナリ、亞耳細徳獨耳微額尼ノ説ニ據レバ④、此等  
 ハ平生稀薄ナル大氣ヲ呼吸スルヲ以テ其胸膈  
 非常ニ大ナルヲ致セリ、且其肺臟ノ氣房ハ之ヲ  
 白人ニ比スレバ大ニメマタ多ナリトイフ、或ハ  
 此説ヲ狐疑スル者アリシガ法耳武斯氏マタ一  
 萬英尺ヨリ一萬五千英尺ニ至ル高地ニ住ム愛  
 馬拉士トイヘル同種ノ者ヲ檢察セシニ其身體

八  
 組  
 論  
 卷二  
 十六



千八百七十  
 年印行倫敦人  
 類學社雜誌新  
 編第二卷第百  
 九十三葉ヲ見  
 三、

ノ長大ナルハ同氏ガ曾テ目撃セル人種ノ更ニ  
 及ブベキ所ニ非スト聞ケリ(四)法氏ハ各長ノ基  
 礎ヲ一千ト定メ諸部ノ寸尺ハミナ此基礎ニ據  
 テ之ヲ化セリ其身體檢察表ヲ觀ルニ愛馬拉士  
 人ノ臂ハ之ヲ白人ニ比スレバ太ダ短カク之ヲ  
 黑人ニ比スレバ更ニ太ダ短シ而ノ脛脚マダ太  
 ダ短小ナリ且コヽニ最モ奇異ナル事アリ此愛  
 馬拉士人ハ各大腿ハ脛骨ヨリ殊ニ短小ニメ即  
 チ大腿ト脛骨トハ二百一ノ二百五十二ニ於  
 ケル比例ヲナセリ然レモ同時ニ検査シタル二

名ノ白人ノ大腿ト脛骨トハ其比例二百四十四  
 ノ二百三十三ニ於ケルガ如シ同ジク三名ノ黑人  
 ハ二百五十八ノ二百四十一ニ於ケル比例ヲナ  
 セリ而メ愛馬拉士人ハ上臂骨マダ正肘骨ヨリ  
 短ナリ斯ノ如ク軀幹ニ接續スル部分ハ短縮シ  
 タルハ法耳武斯氏モイヘル如ク軀幹ハ長大ニ  
 至リシ影響ニハ所謂成長上ノ應報ナリ愛馬拉  
 士人ハ其踵ノ微ニ突出スル如ク身體造構ニ於  
 テ更ニ常ニ異ナル所多シ  
 西班牙人嘗テ此等ノ蠻民ヲ東部ノ低地ニ移セシ

人祖論 卷二 十七



一アリ、方今ト雖モ金砂ヲ淘汰セシメンガ爲ニ、  
 數大俸ヲ以テ之ヲ山下ノ地方ニ呼下ス一アリ、  
 然レモ此等ハ固ヨリ彼ノ高原ノ風土ニ馴染セ  
 シカバ、山足ニ下リシ後ハ、實ニ其生命ヲ保存ス  
 ル者稀ナリ、法耳武斯氏ハ二代連續シタル家族  
 漸ヤク二三ヲ檢出セシガ、ナホ依然トメ舊ニ仍  
 リ特殊ノ造質ヲ保存セリ、然レモ此特質ノ總ジ  
 テ減少セシハ揆ラズノ明了ナリキ、其身體ハ實  
 際之ヲ揆リシニ、果シテ既ニ減縮シ、ナホ彼ノ高  
 原ニ在ル人民ニ及バザル者トナリタリ、而シテ大

⑤學士維堅斯  
 ハ山國ニ住ス  
 ル家動物ノ  
 大ニ其體格ヲ  
 變ゼシ所以ヲ  
 論ゼリ千八百  
 六十九年刊行  
 毎週農事雜誌  
 第十號

腿ハ長ハ少シク増加シタリシガ極メテ其影響  
 ヲ脛骨ニ來タセリ、更ニ精細ナル寸尺ヲ知ラン  
 ト欲セバ、宜シク法耳武斯氏ノ論說ヲ一覽スベ  
 シ、之ヲ要スルニ、高地ニ生息スルト數世ニ及ブ  
 片ハ、必ス其體格ニ遺傳スル變化ヲ致スベキハ  
 分明ナリ、  
 夫レ人類ノ益體部ヲ使用スルモ、益之ヲ使用セ  
 ガルモ、現今ニ在テハ敢テ此カ爲ニ變化ヲ生ゼ  
 ガルニ似タリト雖モ、以上ニ論ズル實事ニ就テ  
 之ヲ察スレバ、未ダ必ズシモ之ヲ致カハルハ理

且論卷二  
 十八



⑧千八百六十七年刊行小頭  
海字傳第五十  
百二十五百六  
十九百七十一  
及七百八十四  
ヨリ百九十八  
葉ニ至ルヲ見

由ナシトス、獸類ト雖モマタ然リ、是故ニ太古人  
祖ノ變轉シテ四足類ヨリ二足類ニ遞進セシ際  
所謂天然撰擇ナルモハ世々體部ハ使用増減ハ  
成果ニ乘ゼシト以テ知ルベシ

暢發ノ停住ヲ論ズ

暢發ノ停住ト生長ノ停住トハ顯然タル區別アリ、暢發ノ停住即チ其不完全ナルモノハナホ生長シテ大ヲ加フト雖モ依然トノ前世ノ情狀アリ、即チ種々ノ異常ナルモノ是ナリ、今茲ニ薄額のノ著書⑤ヲ援キ、小頭痴子ノ暢發不完全ナル

腦漿ニ係ル事情ヲ參考セバ、更ニ之ヲ明カニス可シ、抑此等ノ痴子ハ頭顱殊ニ微小ニメ、腦漿ノ迂曲ハ常人ヨリ更ニ單純ナリ、印堂ハ暢發スト雖モ顱頰太ダ突出セリ、故ニ其體裁總テ彼ハ猿類ニ符合セル者ナリ、オカ心能ハ如キハ論ズルニ足ラズ、口アリト雖モ更ニ談話ハ用ヲナスナシ、又暫時モ事物ニ注意スル能ハス、恆ニ他人ハ所作ヲノミ、倣似セリ、然メ其性甚ダ亂動ヲ好ミ、跳躍ヲ欲シ、作面ヲ樂シ、或ハ葡萄シテ階梯ヲ登リ、或ハ欣喜トメ器具ニ駕リ、或ハ踊躍トメ樹

人祖論 卷二 十九



千八百六十三年七月刊行  
 心學雜誌中來  
 國氏ノ説千八百七十年刊行  
 士格的氏聲啞論第二版第十  
 葉千八百七十一年刊行蒙圖  
 禮氏心身論第  
 四十六葉ヨリ  
 第五十一葉及  
 比寧耳氏ノ  
 説等ヲ見ヨ

木ニ攀ルヲアリ、惟フニマタ童子ハ約テ樹木ニ  
 縁ルヲ以テ一好事トセリ、此ノ如キハ往昔亞耳  
 巴士山ノ山獸ナリシ羔羊ノ小丘ト雖モ好シ  
 之ニ攀躋スルト其情一ナリ、痴子ハ風俗サラニ  
 獸類ニ符合スルトコロ多シ、喫食ハ際每一口必  
 ズマツ之ヲ檢臭シ、然ル後始メテ之ヲ其口ニ収  
 メリ、一痴子マタ嘗テ半風ヲ狩リテアリシニ數  
 口ヲ以テ手カヲ助ケタリ、其習慣一トハ不潔ニ  
 アラザルハナシ、而シテ心ニ笑止羞耻ハ感覺ナシ、  
 且其身體ハ毛髮ニ富メルハ載テ書冊ニアリ、  
 (三)

復古造構ヲ論ズ

茲ニ論述セント欲スル所ノモノハマタ前題ニ  
 屬シテ可ナル性質ヲ存スルモアリ、然レモ身體  
 ノ部分ニ、タトヒ暢發ハ停住シテ不具不完全ナ  
 リ、其部ナホ生長シテ其情全ク同種類中下等  
 ハモハニ於ケル同部ハ體裁ヲ成スモハアリ、是  
 ハ如キハ復古造構トス、何ニトナレバ一種類中  
 下等ニ屬スルモノハ共同祖先ニ接近スルト上  
 等ニ屬スルモノハ一步ヲ占メ、其身體造構更ニ  
 共同祖先ニ密似スレバナリ、然リ而シテ此ノ如キ

且論  
 卷二  
 二十



部分ト雖モ、往昔ナホ斯、ル造構ノ當然ナル祖  
 先ニ屬セシ日ニ在テ既ニ其効用ヲ具ヘシハ疑  
 ナシ、然ラズンバ焉ンヅ生來暢發ノ不完全ナル  
 部分ニモ、ナホ益、生長シ以テ遂ニ其効用ヲ全ウ  
 スルアルヲ得ンヤ、彼ノ小頭痴子ノ腦漿ノ單純  
 ニ、猿ニ類似スル如キハ復古造構ノ一例トイ  
 フベシ、<sup>③</sup>其他更ニ適切ナル數例アリ、一種ノ造  
 構ノ如キハ哺乳類下等ノ生物ニ定存スルモノ  
 ニ、而ノマタ數、此哺乳類ノ上等ヲ占ル人類ニ

③向ニ養馴動  
 植變進論ニ於  
 テハ、余マタ婦  
 人ノ乳房ノ重  
 複セルヲ以テ  
 之ヲ復古造構  
 トセリ、是レ重  
 複乳房ノ往々  
 胸部ニ規布シ  
 至リテハ重複  
 乳房ノ數、脊  
 部、肘部、大  
 腿ノ如キ、諸  
 部ニ發生スル  
 アルヲ知レリ  
 千八百五十九  
 年印

行、普禮亞氏營生戰記第四十五節就中大腿ニ發生セシモノハ殊ニ多量ノ乳液ヲ生ジ以テ嬰兒  
 ヲ養育セリ、然レバマタ此等ハ復古造構トスベカラザルモノニ似タリト雖モ其實否ラズ、何ニ  
 トナレバ其例ノ數多ナル之ヲ偶然ニ付スヘカラザルヲ以テナリ、余タゞニ之ヲ傳聞セシノミ  
 ナラズナホ數之ヲ實察セリ、男子ニメ一對餘ノ乳房ヲ存スル者其數已ニ五名以上ニ及ベリ、蓋  
 シ「ロー」ノ一種ハ固ヨリ胸部ニ二對ノ乳房アリ、千八百七十二年印行雷塞及ビ例門德合著學術志第三百四葉中、學士  
 六葉中、般地塞德ノ說及ビ千八百七十二年印行雷塞及ビ例門德合著學術志第三百四葉中、學士  
 婆土耳士ノ論文ヲ見、婆氏ノ論述セル例ノ一ハ男子ニメ五乳房ヲ存スル者ナリ、而シテ其一ハ  
 臍上ノ中位ニアリキ、密業耳盆邊斯米亞ノ說ニ據レバ、此中乳房ハ蝙蝠ノ類ニアル中乳房ト同  
 物ナリトイフ、若シソレ人祖ノ乳房一對ヨリ多カサランニハ男女両性ニ現出シタル乳房ノ曾  
 テ暢發スベキ所以ナキヲ信ゼリ、  
 同書中第二卷第十二葉余マタ人類及ビ其他ノ動物ニ於テ定規ノ外ニ數多ノ指趾アル者ヲ以  
 テ之ヲ復古造構ニ歸セリ、蓋シ窩蘊氏ニ據レリ、同氏ハ既ニ羽鱷ノ類ニ五指ヨリ多クヲ存セシ  
 モノアリトイヘリ、且藏の未氏ニ據レバ、驚クベシ一人ノ男子手ニ廿五指ト足ニ廿五趾トヲ以  
 テ出產セリトイフ、抑此等ノ指趾ハタゞニ父祖ノ遺傳ニ係ルノミナラズ、ナホ之ヲ疏除スルノ  
 後モ更ニ再生スルヲ恰カモ下等有脊骨動物ニ於ケルガ如シ、復古造構タル所以ノモノマタ以  
 テ觀ルベシ、然レモ現今ハ指趾ノ重複スルモノヲ以テ直ニ之ヲ獸樣人祖ニ回復セル復古造構  
 ナリトスベカラズ、



現出スルアリ、故ニ若シ其現出スル所ハ、縦ニ祖  
先ナル獸類ニ在テハ之ヲ當然ナル造構トスベ  
キモ、人類ニアリテハ之ヲ復古造構ナリトス、其  
所以ハ左ニ例ヲ舉ゲ以テ之ヲ説明スベシ、  
蓋シ哺乳類中子宮ニ數種アリ、其二孔二路ヲ具  
有スル複機ナルモノアリ、有袋類ノ如キ是ナリ、  
其内部ニ微細ナル襞痕アルノミニモ、全ク單機  
ナルモノアリ、猿類及ビ人類ノ如キ是ナリ、其二  
種ノ情狀ヲ并シ、而メマタ此二生物ノ間ニ存  
スルモノアリ、啞獸類ノ如キ是ナリ、約テ哺乳類

ノ子宮ハ二箇ノ粗管ヨリ暢發シタルモノニテ、  
此管ノ下部ハ角狀管ナリ、學士發耳ニ據レバ、人  
類ノ子宮ハ初メ此二管ノ下部ノ聯合シタルモ  
ノニメ、而メ此二管ハ子宮ノ暢發スルニ隨テ短  
縮シ、其成ルニ至リテ遂ニ全ク消失セリ、然レド  
胴部之ナキ生物ニ於テハ其聯合シタルモノナ  
シトイフ、マタ子宮ノ角隅漸ヤク角狀管ニ延及  
セルモノアリ、動モスレバ下等猿類「レマ」等ノ  
如キヤ、高等ナル生物ニ至リテモマタ之ヲ發  
見セリ、



婦人ニ例外ナル者往々之アリ、或ハ成年ニ達スルノ後ト雖モ、ナホ子宮ニ角狀管ノ現存シテ其情ヤ、復機ナルモノアリ、窩蘊ニ據レバ、此等ハ咽獸類ノ如ク二箇ノ角狀管ノ合并シテ一箇トナル遮進期ヲ再過スルモノナリトイフ、是ハ所謂生來暢發ハ不完全ナル機關ニ、ナホ益生長シテ遂ニ其効用ヲ全クスルニ至リシモノナリ、何ニトナレバ、此ヤ、復機ナル子宮ハ兩部ヨク、胎ノ用ヲ成シ以テ本來ノ任ニ背カザレバ、ナリ、又二箇ノ子宮ノ各孔門ト通路トヲ全備セ

一千八百五十九年刊行、解剖及生理字典等五卷第六百四十二葉中、花利亜氏ノ論說、千八百六十八年刊行、窩蘊氏有脊骨動物解剖論第三卷第六百八十七葉、千八百六十五年二月刊行、壹丁不醫學雜誌中、士耳拿氏ノ說等ヲ見ヨ

ル真ノ復機ナルモノアリ、此等ハ即チ暢發ノ進度有袋類ニ復セシモノナリ、若シ然ラズバ、彼ノ精神ヲ具フルモノ、如ク此二小管分レテ二箇ノ機關トナリ、各完全ナル門路ヲ具ヘ、筋肉、系肉核、脈管ヲ全クシ、一トハ欠ル所ナキヨク、此ハ如クナル理由ナシ、豈婦人ノ雙造子宮ノゴトキ純然タル復古造構ヲ以テ之ヲ偶然ノ造作ニ歸スルヲ得ンヤ、抑往古ハ失シタル部分ハ更ニ此ハ如ク興復シテ、縱ヒ幾千萬年ヲ經過スル後ト雖モ、ナホ其體裁ニ異ナラザルモ

人祖論卷二 二十三



④千八百六十  
 七年母の祭博  
 物學社年報第  
 八十三葉嘉  
 氏此論題係  
 未停的路連地  
 毛設來額流變  
 等ヲ援キ之ヲ  
 明證セリ安リ  
 余が著書ヲ  
 駁スル者ハ請  
 フ少シク覽ヲ  
 垂レヨ、

ハハ復古造構ハ他ニ出デザルナリ、  
 博士嘉彌斯の里内マタ此事ヲ始トメ種々類似  
 ノ諸件ヲ研究シタリシガ遂ニ前條ト結局ヲ同  
 ウセリ、加之四手類及ビ其他ノ哺乳類ニ於テ顚  
 骨或ハ二箇ノ部分ヨリ成ルモノアルノ例ヲ示  
 セリ④是レ人胚二閱月ニ於ケルノ常情ナリ、然  
 レバ暢發ハ停住スル所ハ成年ニ達スルノ後ト  
 雖モ顚骨マタ此ノ如キモノアリ、特ニ顚骨突出  
 セル下等人種ヲ以テ之ヲ常トス、故ニ同氏ハ以  
 爲ラク人類ノ祖先ニ在テハ顚骨固ヨリ二箇ニ

分レテアリシヲ後ニ至リ粘合シテ一トナリシ  
 モハナリト、人類ノ額骨マタ一箇ヨリ成ルモノ  
 ノ如クナレバ、人胚、嬰兒、下等哺乳類等ニ於テハ  
 ミナ縫口アリ、二箇ノ部分ヨリ成ルノ甚ダ分明  
 ナリ、此縫口ハ人類成年ニ達スルノ後ト雖モ十  
 ホ判然タルモノアリ、而メ其最モ著明ナルモノ  
 ハ今代ニ屬スルモノニアラズ、古代ニ屬スル  
 モノニアリ、特ニ嘉氏ノ説ノ如ク流野ヨリ掘出  
 セシモノニシテ其形狀前後ハ狭ク左右ニ廣キ頭  
 顚ニアリ、嘉氏マタコトニ歸著スル所ノ論點モ

人類論 卷二 二十四



以西德饒弗  
禮仙費禮匪不  
正造構論第三  
卷第四百三十

ナホ、顛骨ニ係ル結局ニ於ケルガ如シ、凡ノ此等ノ事件ニ於テ古代人類ハ獸類ニ彷彿タルハ今代人類ノ得テ及ブベキ所ニアラズ、是レ他ナシ生物ノ系譜ニ就テ之ヲ考フレバ、今代ハ人類ハ遠ク夫ハ半人半獸ハ太祖ヲ距リ、古代ハ人類ハ最モ之ニ接近スル所以ナリ、多少此等ニ類似スル不正造構ノ更ニ人類ニ屬スルモノ多シ、ミナ復古造構ノ例トメ諸論者ノ説述ニ係リ一モ疑ヲ容ルベキナシ、是レ此造構ノ從來固有スルハ悉ク哺乳類下等ノ部ニ屬ス

七葉中本旨ニ  
係ル諸例ヲ列  
載セリ、  
千八百六十  
八年印行有春  
骨動物解剖論  
第三卷第三百  
二十三葉

レバナナリ、  
牙ハ人類ニ於テモ咬嚼ノ爲ニ欠クベカラザル要具ナリ、而メ窩蘊ノイヘル如ク、其真ニ獸牙タル所以ハモハハ形状ニアリ、其形ヤ、鈍頭ナル尖圓ニメ、外側ノ周圍ハ凸形ナリ、内側ノ周圍ハ殆ンド平面ナルアリ、微ニ凹狀ナルアリ、下部ニ少シク突起セル所アルアリ、抑尖圓形ノ著明ナルモノハ瑪拉尼安種族ナリ、就中濠洲人ヲ以テ其最トス、牙ハ門齒ニ比スレバ頗ル深く加ワルニ堅固ナル牙脚ヲ有セリ、然レモ是レ已ニ人



千八百六十六年刊行、形象論綱第二卷、第百五十五節

千八百六十四年刊行、英譯加爾薄額的人類論、第百五十一葉ヲ見ス

類ハ爲ニ仇敵ヲ噬撃スルハ用ヲナサズ、故ニ此一箇條ハミテモ其不具物タルハ明瞭ナリ、哈客爾ノ説ノ如ク、博ク鬪體ヲ研究スレバ、或ハ牙ノ突出シテ全ク列齒ノ外ニ出ルモノアリ、而シテ此ノ如キ者ニ於テハ必ズマタ下顚ノ齒間ニ上顚ノ牙ヲ納ル、ニ宜シキ空處アリ、上顚ノ齒間ニ下顚ノ牙ヲ納ル、ニヨロシキ餘地アリ、相互ニ之ヲ収納スル、此ノ如シ、嘗テ和愚奈ノ圖説ニ係ル蓋非人ノ鬪體ニ於テ見タル此齒間ノ空處ハ其廣濶ナル驚クニ堪ヘタリ、  
④、マダ古

千八百六十七年刊行人類學評論第二、九十五葉中、如得伯禮格納列的ヨリノ顚骨ニ係ル論及ビ、千八百六十八年刊行、同評論第四百二十六葉中書方仙ノ説等ヲ見ス

代ノ鬪體ト今代ノ鬪體トヲ比較スルニ古代ノ鬪體ニ牙ノ頗ル抽出スルモノ既ニ三個ニ及ベリ、殊ニ納列的ヨリノ顚骨ニ於テ非常ナリトス、  
然レ女性「ゴリラ」及ビ女性「ヲラング」ニ牙ノ外ニ突出スルモノアリ、人類中ニモ或ハ婦人ニ然ルモアリト雖モ、似人猿類ニ於テハ獨リ男性ノ牙ノミ全ク暢發セリ、故ニ男子ハ牙ハ暢發完全ナルハ殊ニ猿樣高祖ニ似タリトス、人類ノ之ヲ現有スルハ即チ祖先ハ斯ハル兵器ヲ所持セシ所



千八百四十  
四年印行容貌  
解剖論第百十  
第三百一十一葉

以ナリ、然リト雖モ、人自カラ此ノ如キ牙ヲ有シ、  
マタ他人ノ之ヲ存スルヲ知リ、而メナホ此說ヲ  
排存シテ容レザル者アリ、ソレ自カラ之ヲ排存  
シテ其由緒ヲ蓋ハントスルハ自カラ其由緒ヲ  
明示スル所以ナリ、牙ハ人類ニ在テ既ニ兵器ノ  
用ヲ成サズ、マタ之ヲ成サシムルノ勢ヒナシト  
雖モ、查爾斯、白爾君ノイヘル<sup>④</sup>憤激筋ナルモノ  
ヲメ偶然縮結セシメ、以テ之ヲ顯ハシ、隙ヲ狙フ  
テ咬撃セントスルアルハ、其狀恰カモ、犬狗ハ將  
ニ戰ハントシテ備ヘタルガ如シ、

千八百六十  
七年刊行博物  
學社年報第九  
十葉中、博士嘉  
彌斯の里内ノ  
引證ニ據ル

四手類、マタハ他ハ哺乳類ニ固屬スル筋ハ屢人  
類ニ暢發スルモ、ハアリ、博士未刺格比屈<sup>④</sup>四十  
人ノ男子ヲ檢察セシニ、其十九人ハ同氏ガ名ツ  
ケテ臀骨筋トイヘル一種ノ異筋ヲ有シ、他ノ三  
人ハ之ニ易フルニ交節筋ヲ以テシ、殘ル十八人  
ハ少シモ其形跡ヲ存スル者ナカリケリ、マタ女  
子三十人ノ中ニテ此筋ノ兩脇ニ暢發シタルハ  
タゞニ二人ナリシガ、外ニ不暢發ナル交節筋ヲ  
存スル者三人ナリキ、然レバマタ此筋ヲ存スル  
者ハ婦人ヨリモ男子ニ多シトス、而メ人類ハ獸



〇千八百六十  
 五年刊行、學士  
 會院雜誌第十  
 四卷第三百七  
 十九第三百八  
 十四葉同六十  
 六年刊行同第  
 十五卷第二百  
 四十一同四十  
 二葉同六十七  
 年刊行同第十

類ヨリ出シ所以ヲ考フレバ更ニ之ヲ詳カニセ  
 リ、何ニトナレバ此筋多ク獸類ニ在リ、且之ニ在  
 テハ專ラ男性ノ爲ニ生殖事件ヲ大成スレバナ  
 リ、  
 鳥德氏嘗テ論說數編ヲ以テ講究セシガ、〇人類  
 ノ變筋ノ獸類固有ノ筋ニ類似スルモノハ其數甚  
 ダ多シ、然レモ人類最近ノ戚族ナル四手類固有  
 ハモノハニ類似スル變筋ニ至リテハ、更ニ多雜ニ  
 マ、コ、ハニ其大別ヲ示スモ得テ難シトス、例ハバ  
 身體健剛ニメ頭顱完全ナル一人ノ男子ニ七筋

五卷第五百四  
 十四葉同六十  
 八年刊行同第  
 十六卷第五百  
 廿四葉ヲ見ヨ  
 マタ千八百六  
 十九年刊行、動  
 物學社報告第  
 二卷第九十六  
 葉ニ護里氏ノ  
 說アリ、  
 〇千八百六十  
 八年印行、愛爾  
 蘭學術院報告  
 第十卷第百廿  
 四葉中、麥嘉理  
 斯得氏ノ說ヲ

有餘ノ變筋アリ、而メ此等ハミナ諸種ハ猿類ニ  
 固有スルモノナリ、且此男子ノ左右ノ頸側ニ強  
 大ニメ純然タル鎖柱骨起筋アリ、是レマタ猿類  
 ニ定存スルモノハニテ人類ニ於テハ大略六十人  
 中一人ハ必ズ之ヲ存セリ、〇又此男子ニ第五指  
 ノ趾骨ノ縮埋筋アリ、此筋ハ哈屈禮普拉華等ノ  
 諸氏ニ據レバ、高等下等ヲ論セス普子ク、猿類ニ  
 存スルモノハナリトイフ、ナホ二箇條ノコ、ニ述  
 フベキモノアリ、肩胛基筋ハ全ク猿類以下ハ哺  
 乳類ニ屬シ、而メ四足ヲ以テ歩行スルモノニノ

八  
 且  
 論  
 卷二  
 二八



見三  
 ④千八百七十一年十一月刊行解剖及性理雜誌第七十八葉中修布氏ノ説ヲ見ヨ  
 ⑤千八百七十二年五月刊行同上第四百廿一葉  
 ⑥同上第百二十一葉中博士麥嘉理斯得ニ據レバ變筋ノ多キハ手背ヲ第一トシ面部

ミ限レルガ如シ⑤而ルニマタ六十人中一人ハ必ズ之ヲ存セリ、貌刺德禮氏ハ人類ノ兩足ニ第五趾蹠骨外轉筋ヲ發見シタリ⑥此筋ハ當時ニ至ルマデ人類ニ之ナキモノトセシガ似人猿類ニハ固ヨリ存スル所ナリ、夫レ手ト足トハ人類ニ於ケル特殊ノ造構ナリト雖モ、其筋非常ニ變化シテヨク獸類ニ於ケル同種ノ筋ニ類似セリ⑦然レ其類似スルモノニ完全ナルアリ、不完全ナルアリ、不完全ナルハ現ニ遞進ニ際セシモノナリ、マタ其理ハ未ダ之ヲ詳カニセザレバ變化

ヲ第二トシ、脚足ヲ第三トス  
 ④千八百六十四年六月廿七日印行愛爾蘭學術院報告第七百十五葉中  
 ⑤方東ノ説及ビ同誌第十卷第百三十八葉中  
 ⑥博士麥嘉理斯得ノ説ヲ參考セヨ  
 ⑦本書初版既成ノ後、千八百七十一年理學

ノ男性ニ常ナルモノアリ、女性ニ常ナルモノアリ、烏德氏ハ肌筋造構ノ通規ニ戻ルモノト雖モ、未詳ノ原由アリテミチ之ヲ一定ノ方向ニ由ラシメタリ、是レ解剖學ヲ修メント欲スル者ハ宜シク研究セザルベカラザル重件ナリトイヘリ⑧  
 蓋シコ、ニイフ未詳ハ原由トハ所謂上古ノ體裁ニ復セントスル復古造構ナルヤソレ甚ダ明カナリ⑨苟モ人猿生發ヲ相同ウスルニ非ンバ、一人ニメ偶然猿類ニ類似スル肌筋ノ七個有餘



雜誌中人類ノ  
頸肩胸筋ノ變  
化ニ係ル鳥德  
氏ノ論文ヲ得  
タルニ其論悉  
ク余ガ説ヲ證  
明セリ

ニ及ブベキ所以ナシ、マターノ論點ヨリ之ヲ考  
フレバ、猿類ヨリ出シ人類ニシテ、縦ヒ幾千萬世ヲ  
經過スルニ、彼ノ馬、驢、騾ノ數千世ヲ隔テタル後  
ニ、黒條ノ突然肩脚ニ再發スル如ク、肌筋等ハモ  
ハ驟カニ再生ス可ラザルヲ保ツ能ハス、  
本條ニ論述スル復古造構ノ諸例ハ、第一卷中ニ  
論ゼシ所ノ不具ナル機關ノ例ニ等シキモノニ  
テ、此ヲ彼條下ニ述ベ、彼ヲ此條中ニ論ズルモ肯  
テ不當ナリトスベカラザルモノ多シ、譬ヘバ人  
類ノ子宮ノ角狀管ヲ有スルモノハ、哺乳類中或

種ノ固有スル子宮ニ異ナラザルモノニシテ、タゞ  
彼ニ在テハ暢發完全ナリトスルモ、此ニ在テハ  
其不完全ナルモノ即チ復古造構トスルガ如シ、  
マタ人類一般ニ定存スル男子ノ乳房ノ如キ機  
關アリ、男女ニ通屬スル尾龍骨ノ如キモノアリ、  
此等ハ正シキ不具ノ造構ナリ、然レバ肱窩上孔  
ノ如キ人類一般ニ之ナキモノハ即チ復古造構  
ノ部ニ屬セシムベキモノナリ、復古造構及ビ不  
具ノ造構ハ實ニ人類ノ獸類ヨリ出シ確證トイ  
フベシ、

人類論 卷二 三十一



連發變化ヲ論ズ

人體造構ハナホ獸體造構ノ如ク、彼此ノ部分屢  
密接ノ關係ヲ有セリ、故ニ甲部變ズルハ乙部  
必ズマタ變ズルアリ、然リト雖モ是レ敢テ甲部  
ノ乙部ヲ管理スル所以ニアラズ、マタ甲乙二部  
共ニ或ル先ダツテ暢發セル部分ノ爲ニ管理セ  
ラル、所以ニアラズ、蓋シ何如ノ理由ヲ以テ然  
ルヤ往々其所以ヲ詳カニセザルモノアリ、饒弗  
禮ノ主張スル如ク、種々ノ怪異ナル不具ノ部分  
ハ即チ此關係ヲ有スルモノニ似タリ、且偶匹ノ

本旨ニ係ル  
證據ハ養馴動  
植變進論第二  
卷第三百二十  
葉及ビ第三百  
三十五葉ニ出  
ズ

造構ニ於テハ變化殊ニ連發セリ、密業耳嘗テイ  
ヘルアリ、手筋ノ變化シテ正法ニ戻ルモノハ必  
ズ常ニ足筋ニ類似シ、足筋ノ變ジテ常ニ異ナル  
モノハマタ果シテ手筋ニ符合セリト、視官ト聽  
官トノ如ク、齒ト髮トノ如ク、皮色ト髮色トノ如  
ク、血色ト資質トノ如キモノハ多少連發變化ヲ  
ナセリ、蓋マタ博士書方仙ハ下等人種ニ特別ナ  
ル一種ノ筋絡ト眉稜ト相關係スルトコホアル  
所以ヲ檢出セリ、

偶然變化ヲ論ズ

組論 卷二 三十一



本旨ハ既ニ  
養馴動植變進  
論第二卷第二  
十三編ニ究論  
セリ

前條中ニ屬スベキ諸變化ノ外ニナホ偶然變化  
トイフベキ一大種ノ變化アリ、是レ人智ノ未ダ  
及バザルニヤ其歸スベキ原由ヲ詳カニセス、然  
レ此等ノ變化ハタトヒ各自一個ノ小異ヲ生  
ズルモ身體造構ノ點然タル大異ヲ致スモ、主ト  
ノ百體構成ノ資質ニ由リ、加フルニ從來經歷セ  
ル境遇ノ影響ヲ帶ブルト太ダ明カナリ、  
人口増殖ノ度ヲ論ズ  
附人口増殖ノ妨害ヲ論ズ  
合衆國ノ如キ文化ノ人民ハ二十有五年ニ其

千八百二十  
六年印行、上帝  
道博士馬爾沙  
斯民口論第一  
卷第六葉及ビ  
第五百十七葉  
ヲ見ヨ

人口ヲ倍ストイヒ、マタ歐拉ノ計算ニ據レバ纔  
カニ十有二年餘ニメ之ヲ倍セリトイフ、然レ  
バ則チ合衆國ノ現口ヲ以テ三千万人ト看做シ、  
始ノ計算ニ據ルモ六百五十七年ヲ經バ、此人口  
増殖シテ地球ハ水陸全面ヲ包裹シ方三英尺ハ  
地ニ四人ハ人員ヲ容レザルヲ得ザルニ至ルベ  
シ、然レモコ、ニマタ種々ナル妨害アリ、彼ハ生  
計ヲ聊シシ安寧ヲ享クルハ難事ナルガ如キハ  
最モ普通ノ大害ナリ、其然ル所以ハ之ヲ合衆國  
ニ徵セリ、本國ハ生計容易ニメ而メ土地廣大ナ

且論卷二  
三十二



リ、故ニ人口陸續トシテ増殖セリ、若シ英國ニ於テ  
モ此等ノ便宜ノ突然倍スルコトアラバ、人口モ隨  
テ倍スルニ至ルベキナリ、開明ノ國ニ結婚ハ制  
度アルト、窮民社會ニ嬰兒ハ死數ハ非常ナルト、  
敗宅荒屋ニ群居スル者ハ諸病ニ罹リ古今死凶  
ハ夥多ナルトハ、マタミナ與カリテ妨害トナル  
者ナリ、但シ天災、兵革、流行病等ノ爲ニ一時國民  
ノ人口ヲ減損スルコトアリ、其境遇ノ好適シタ  
ラシニハ久シキヲ出ズシテ之ヲ平均シ、動モス  
レバ却テ以前ニ超越スルコトアルベシ、人民移轉

ハ多キモ一時ノ妨害ヲナセリ、然レモ居ヲ移ス  
如キ者ハ之ヲ要スルニ窮民ナリ、故ニマタ其結  
果ヲ見ザルモアリ、  
抑生殖力ハ文化ノ人民ヨリモ野蠻ノ人民ニ少  
シトノ説ハ、馬爾沙斯ナドモ謂ヘル如ク、大ニ疑  
シキ事ナリ、此一條ニ係リテハ殆ンドイフベキ  
所ヲ知ラズ、蠻民ノ如キハ人口ヲ調査セシコトナ  
キヲ以テ殊ニ之ヲ知ルニ由ナシ、然レモ宜教師  
其他蠻民中ニ居留セシ者ノ傳説ニ據ルニ、蠻民  
ノ家族ハ大勢ナル者甚ダ稀ニ約子ミナ小勢



園養馴動植變  
進論第二卷第  
百十一葉ヨリ  
同十三葉ニ至  
リ及ビ第百六  
十三葉ヲ見ヨ

ナリ、其故ハ婦人ノ幼穉ヲ乳養スル時間ノ長キ  
ヲ以テモ之ヲ推知スルニ足レリ、マタ一説ニハ、  
蠻野ノ人民ハ數艱難辛苦ヲ經加フルニ文明人  
民ノ如ク滋養物ヲ食ハザルヲ以テ生殖力ニ乏  
シキ所アリトイヘリ、是レソレ或ハ是ナランカ、  
余既ニ之ヲ養馴動植變進論ニ講究シタリシガ  
(天)家生禽獸草木ハ野生同種類ニ比スレバ總テ  
速カニ繁殖セリ、動モスレバ禽獸忽然其食ニ富  
ミ以テ肥大ヲ致シ、或ハ草木卒然瘠土ヨリ肥地  
ニ移リ以テ豊生スルアリト雖モ、是レ敢テ家生

園千八百六十  
三年七月印行  
設日維基氏中  
外外療雜誌第  
百七十葉ヲ見

動植物ノ繁殖ノ野生物ニ勝ル理由ニ反セザル  
者ナリ、是故ニ開明ノ人民ハ所謂養馴ノ至リシ  
者ニテ、之ヲ野蠻ノ人民ニ比スレバ或ハ多生ナ  
ルニ近シ、且開明セル人民ノ益繁生スルハ家生  
動物ノ如ク遺留性質トナリタル者ニ似タリ、人  
類ニ双子ヲ産スルノ例多ク系統ヲ傳フルノ勢  
アルハ以テ觀ルベキナリ(五)  
蠻野ノ人民ハ縱ヒ其生殖力ヲ以テ開明ノ人民  
ニ如カザル所アリ、敢テ之ヲ抑壓シテ其妨害  
ヲ加フルニ非レバ、其増殖ノ急カナル可キハマ

人  
且  
論  
卷二  
三十四



千八百六十八年印行翰太氏便加爾在留日記第二百五十八葉

タ疑ナシ、其證ハ之ヲ山太來トイフ印度山中ノ民族ニ徴セリ、此民族ハ翰太氏ノ説ニ據ルニ(六)近來種痘ヲ導キ、時疫ヲ豫防シ、交戦ヲ廢止セシガ其以降人口増殖ノ急カナリシハ非常ニ出デタリ、然レデ此野人近隣ノ地方ニ散移シ以テ備エヲ勉メシニ非ンバ、或ハ然ラザリシモ未ダ知ルベカラズ、マタ野蠻ノ人民ハ配偶ヲ以テ常トセリ、然リト雖モ其俗ニマタ自カラ制限ノアルアリテ猥リニ結婚ノ早キヲ競フニアラズ、凡ソ若年ノ男子ハ妻ヲ求ムルニ方テマヅ之ヲ扶持

シ能フベキ所以ヲ明證セザルヲ得ズ、而メ女子ヲ其父母ニ購フニ若干金ヲ要セリ、故ニ之ヲ籌策スルハ其第一歩ナリ、且蠻民ハ飢饉災殃ノ爲ニ族ヲ擧テ禍ヲ被ルアリ、是レ其生計ヲ聊ハズルハ難キハ直接ニ人口ヲ制限シ、開否ハ人民日ヲ同クシテ語ルベカラザル所以ナリ、然リ而メ、其一旦飢饉ニ際スレバ止ヲ得ズ、粗物ヲ食スルニ至リ、勢トメ健康ヲ害セザルナシ、飢饉中胃腑ノ凸出シ、四肢ノ衰瘠セル等ニ係ル事多ク諸種ノ紙上ニ見ヘタリ、而メ此ノ如キ時節ニ方テハ



自然四方ニ漂遊スルコトアリ、因テマタ小兒ノ死  
ヲ致ス者多シ、此等ノ件ハ余ガ已ニ濠洲人ニ就  
テ實察スル所ナリ、然レノ飢饉ノ來ルヤ略定期ア  
リ、加之概子季候ノ非常ナルニ因レリ、故ニ諸蠻  
必ズ人口減殺ヲ免カレズ、マタ食物ハ獨リ人爲  
ヲ以テ生作スベカラザレバ、蠻民ノ人口ハ連綿  
増殖スベキ所以ナシ、且飢渴ノ極ニ達シ危急且  
タニ迫ルルハ他ノ所領ヲ侵掠シ、以テ死傷ヲ受  
クル者其數知ルベカラズ、蠻民ハ固ヨリ近隣ノ  
種族ト相争ヒ殆ンド一日ノ間斷ナシ、而ルニコ

、ニ至リ更ニ其甚ダシキヲ致セリ、マタ或ハ食  
ヲ深山窮海ニ覓メ、數災害ヲ招クアリ、或ハ猛獸  
ノ爲ニ難ヲ被ルアリ、印度ノ如キニ於テハ往々  
兇虎ノ爲ニ惱マサレ、人民悉ク凶失セシ地方モ  
アリ、

馬爾沙斯マタ此等ノ妨害ニ論及セシガ、此問題  
ニ關シ最モ緊要ナル墮胎殺兒特ニ殺女兒ノ結  
果ハ之ヲ忽視セシ者ノ如シ、抑馬格蓮南氏ガ  
論ズル如ク往古ハ墮胎殺兒ノ惡習特ニ熾ンナ  
リ、而メ方今ト雖モナホ其存スル處アリ、熟此惡

西千八百六十  
五年刊行上古  
結婚志



◎游觀新聞千八百七十一年三月十二日第三百二十葉一記者アリ此章句ヲ評スル一左ノ如シ、  
駝頰氏ハマタ新タニ人類犯罪ノ宗則ヲ設立セリ、其所以ハ蓋シ高等獸類ノ稟性ヲ以テ遙カニ下等人類ノ習性ニ卓越スルモノトナシ、而シテ

習ノ由テ來リシ原由ヲ按ズルニ、是レ野蠻ノ人、民盡ク所出ハ、嬰兒ヲ養育スルハ難キヲ認メ、ハ所以ナリ、彼ノ淫風汚業ノ盛ナルモ、マタ人口繁殖ノ妨害ヲナセリ、但シ此等ノ如キハ必ズシモ生計ノ立タザルニ出ルモノニ非レド、或ハ人口繁殖ヲ防クノ一端トシテ行ナハル、處ナキニシモ非ルナリ、  
遠ク上古ニ溯リ之ヲ考フルニ、人類ノ品位未ダ今日ノ如キニ至ラザリシ片ハ、其進退舉止トモ道理ニ基カザルハ遙カニ今世最下ノ蠻民ニ下

民ノ惡習トイヒ、殊ニ結婚ニ係ルモノ、如キヲ以テ之ヲ考フレバ、一旦人類ノ知識ヲ得シハ、永々徳行ノ衰退ヲ致セシ所以ナリトセルハ、名ハ學術上ノ論說ナリト雖モ、實ニ知ラズ識ラズ基督教ノ體裁ニ法リ、再ビ世ニ一派ノ宗教ヲ新立セル

リ、而シテ專ラ其本性ニ由ルハ遠ク其及バザル所ナリ、故ニ半人半獸ハ太祖ハ殺兒多配ハ惡習ナカリシ者ナリ、是レ獸類ノ本性ハ未ダ曾テ我産生スル嬰兒ヲ殺棄スルニ至リシ者ナク、マタ嫉妬ハ念ハ欠乏シテ猜疑ハ心ナキ者ヲ見ザレバ、ナリ、而シテ其俗ニ敢テ結婚ノ制限アルニ非レバ、年齒ナホ早シト雖モ男女意ニ任セテ配偶スルヲ得シ者ナレバ、人祖ノ繁殖セシハ必然神速ナリシト疑ナシ、然リト雖モ或ハ定期ハ妨害アリ、或ハ平時ハ妨害アリ、以テ其人口ヲ損込セシ



ニスギガレバ  
ナリ、ソレ人類  
ノ初ノ良心ノ  
戒メヲ犯シ禁  
葉ヲ食シ爲ニ  
知識ヲ得シハ  
即チ德行ノ永  
衰セシ所以ナ  
リトスル猶大  
ノ傳言モ豈コ  
シ、ニ止ラザラ  
シヤ、

ハ今時ノ蠻民ニ於ケルノ類ニアラザルミシ、然  
リ而メ此妨害ノ詳細ハ得テ知ルベカラズト雖  
モ、ナホ諸動物ノ急カニ増殖セザル事由ノ得テ  
解スベカラザルト其理一ナリ、牛馬豕羊ノ如キ  
ハ非常ニ繁生スベキ動物ニ非レバ、南亞米利加  
ニ於テ嘗テ始テ之ヲ放飼セシ際、其繁殖ノ急カ  
ナリシハ實ニ驚クニ堪ヘタリ、象ハ動物全種類  
中増殖ノ最モ遲緩ナル者ナレバ、若シ此ノ如ク  
セバ數千年ヲ出ズシテ必ズ全地球ヲ掩フニ至  
ルベシ、猿類各種ノ増殖モマタ幾多クカ妨害ヲ

蒙リシハ必定ナリ、然レバ貌廉ノイヘル如ク此  
等ハ敢テ賊獸ノ爲ニ爪掠セラレシト等ハ之ナ  
キ者ノ如シ、マタ亞米利加ノ野馬及ビ家畜ノ如  
キハ始メ其生殖力ノ増加セシヲモ見タル者ナ  
ク、而ノ已ニ繁殖セシ後ニ及ビテハ其減略セル  
ヲモ知ル者ナシ、然リト雖モマタ敢テ増殖ノ妨  
害ヲ免カレシ者ニアラズ、總シテ生物ハ何種ヲ  
問ハズ多少此妨害ヲ蒙リ、而メ其境遇ヲ異ニス  
レハ隨テ妨害ノ性質ヲ異ニセシハ明カナリ、彼  
ノ時侯ノ不順ナルニ由テ定期ノ死失アル如キ

人祖論 卷二 三十八



④千八百六十  
九年印行、天地  
間雜誌第百  
三十一葉中、斯  
端禮、日盆ノ説  
ヲ見ユ

ハ所謂妨害中ノ妨害タリ、上古人類ハ祖先モマ  
タ此患ヲ免カルベカラザリシ者ナリ、

天然撰擇ヲ論ズ

人類ハ心身ニ變化アリ、而シテ此變化ハ或ハ直接  
或ハ間接ナルモ、須ラク生物普通ノ原因ヨリシ  
生物普通ノ規則ニ遵ヒ、決メ人獸ハ間ニ異ナル  
ナキ所以ハ既ニ之ヲ明シセリ、實ニ人類ハ廣ク  
地球上ニ散布スレバ、其反覆移轉ノ際無窮ノ事  
情ニ遭遇セサルヲ得ズ、  
⑤、一半球ニ於テ提拉得  
休、喜望峯、打斯馬尼亞ノ住人ノ如ク、他ノ半球

④千八百五十  
一年印行、拉撒  
人類轉徙考第  
百三十五葉ヲ  
見ユ

ニ於テ北極地方ノ居民ノ如キハ種々ノ氣候ヲ  
經居處ヲ移セシ、何回ニモ今日占據スル家宅  
ニ達セシヤハ得テ知ルベカラズ、  
⑥、且人類ハ祖  
先ハ諸動物ノ如ク急カニ繁殖シ、居然生計ヲ聊  
ンズル能ハザルニ至リシ、疑ナシ、故ニマタ營  
生ノ争鬪ヲ起シ、遂ニ天然ノ撰擇ニ馴致シ、爲ニ  
身體ノ有害ナル部分ハ愈變化シテ凶失シ、有益  
ナル部分ハ愈變化シテ遷進スルノ情勢ヲ成セ  
リ、但シ此等ハ身體造構ノ多年ニ出デタル大伴  
ノ變化ヲイフニアラズ、専ラ各自ハ小異ヲイヘ

且論  
三十九



④千八百六十九年印行動物學社報告第七卷第九十六葉ヨリ同九十八葉ニ至リ護里茨藤的二氏説ヲ見ヨ

リ、即チ人類ノ活動カハ屬スル所ナル手筋足筋ハ、ナホ獸類ニ於ケルト同シク常時變轉シテ止マザル者ハ如キ是ナリ、<sup>⑤</sup>故ニ例ヘバコ、ニ人類ノ祖先アリ、殊ニ事情ノ變轉スル一地方ニ住居セリ、若シ之ヲ等分シテ二群トナシ、而シテ其一群ハ活動力ノ無雙ナルヲ以テ或ハヨク衣食ヲ覓メ、或ハヨク外敵ヲ防クニ適セル者ヨリ成リ、他ノ一群ハ否ザル者ヨリナルトシタランニハ、則チ此優等ナル一群ハ之ヲ他ハ萬事ニ不適當ナル者ヨリ成ル一群ニ比スレバ、一旦事アルニ

臨ンデ生殘スル者更ニ多ク、而シテ其子孫ノ繁榮スルモ、タサニ急カナルベシ、

人類ノ萬物ニ靈タル所以ヲ論ズ

人類ハ縱ヒ方今野蠻ヲ以テ目セラル、者ト雖モ曾テ地球上ニ現出シタル生物ノ最高ナル者ニシテ、其居處ノ廣大ナルハ他ノ高等動物ト雖モ及ブベキ所ニ非ズ、人跡ノ通ズルトコロ獸類其跡ヲ絶テリ、蓋シ人類ハ人類タル所以ハヨク心能ヲ具シ、知識ヲ進メ、ヨク仁義ヲ識リ、緩急相助ケ、ヨク靈體ヲ有シ、妙用ヲ備フルニアリ、彼此和



千八百七十  
 年十月印行此  
 評論第二  
 百九十五葉  
 天孫  
 際限

ヲ講ジ卒ニ營生戰ヲ止メシ如キハ即チ以テ之  
 ヲ徵スルニ足レリ且人類ハ清亮ナル言語ヲ表  
 出セシハ心能ノ至大至妙ナル所以ニシテ而人  
 類開進ノ斯ハ驚クベキヲ致セシハ抑マク言語  
 ノ効用窮リナキ所以ナリ查運西來的氏曰ク  
 心理學ニ由テ言語ハ心能ヲ分析スルニ少シク  
 之ヲ進ムルハ大ニ他件ヲ進ムルヨリ更ニ腦力  
 ヲ要セリトマタ人類ハ各種ハ兵器器具機檻等  
 ヲ發明シ以テ其身體ヲ保護シ以テ禽獸ヲ狩獲  
 シ以テ食物ヲ占有スルヲ得タリ木舟桴楫ヲ創

作シ以テ漁シ以テ航シ以テ近隣膏腴ノ島嶼ニ  
 移轉スルヲ得タリ火ヲ生ズルハ術ヲ發見シ以  
 テ堅硬多網ナル草根ヲノ食化シ易カラシメ有  
 毒ナル菓實ヲノ害ナカラシムルヲ得タリ凡ソ  
 言語ヲ除クノ他ニ曾テ人類ハ成シ得タル最大  
 ナル功業トイフベキ此生火ハ術ハ發見モ實ニ  
 有史以前ニ在リ夫レ未タ蠻野ノ俗ヲ脱セザル  
 人類ニシテ既ニ斯ハ如キ緊要ナル諸般ハ發明ア  
 ルハ是レ豈視察力記臆力好奇性想像力道理心  
 ノ暢發セシ現果ナリト云ハザルヲ得ンヤ然レ

且論卷二 四十一



⑤千八百六十九年印行四季評論第三百九十二葉〇千八百七十年印行和禮士氏天撰論中コ、ニ論及シ、而ノ本書ニ引用スル論文ハ悉ク之ヲ其書ニ登錄セリ

バ則チ彼ノ和禮士氏ガ⑤天然ノ撰擇ハ蠻民ノ腦漿ヲノ猿類ノ腦漿ニ彷彿タルヲ得セシムルニスギズトスル所以ヲ解セズ、  
 人體造構ノ妙用ヲ論ズ  
 才德ハ人類ニ賦與スル至高ハ品性ナリ、然リト雖モ身體ノ妙用ヲ備フルハマタ肯テ一步モ之ニ讓ルベキ所ニアラズ、是ヨリ以下專ラ其所以ヲ討論シ、而ノ才德ニ係ル議論ハ暫ラク之ヲ下編ニ讓ル、  
 假令打槌ト雖モ之ニ精達セント欲スレバ其事

⑥千八百六十九年二月印行德伯林四季醫學雜誌中老遜辛的氏天撰法ノ引用ニ據ル〇學士客刺モマタ之ヲ引用セリ

決ノ容易ノ業ニアラズ、苟モ工匠ノ道ニ從事セシ者ハミナ之ヲ知レリ、彼ノ非地人ノ如ク敵ヲ禦キ、又ハ鳥ヲ獲ント欲シテ之ヲ正鵠トナシ、以テ石ヲ放チ、百發百中シテ一失ナキヲ致スハ、是ハ手臂、肩筋及ビ銳利ナル觸官ハ協合シタル能カラ要セリ、然ノ石ヲ放チ鎗ヲ投ゲ若クハ其他ノ事ヲ做スモ、其人マツ正立セザルベカラズ、是ハ更ニ諸筋ハ協カラ要スル所ナリ、マタ鑑定ノ名審司ナル斯居爾格拉弗的氏ノイヘル如ク⑥石刀石鏃ノ工作モ上古人民ノ非常ナル巧術ト

且論卷二 四十二



積年ハ習熟トヲ窺ヒ觀ルニ足レリ故ニ火石ヲ  
以テ粗器ヲ作り骨片ヲ以テ鎌鉤ヲ製スルモ一  
トノ用手ハ術ヲ要セザルナシ然リ而ノ上古ノ  
人民各ミナ火石器具ヲ作り粗瓶ヲ製セシ者ニ  
アラズ既ニ分業ヲ施行シタゞ其中若干人員ノ  
ミ專ラ此ニ從事シ自餘ノ者ハ其狩獲スル所ヲ  
以テ之ト交易セシモノ、如キモマタ彼ノ工作  
ハ習熟ヲ要スル所以ヲ明カニセリ方今古物學  
者ノ信ズル所ニ據リテモ人類ノ祖先ガ火石ノ  
裂片ヲ礪磨シテ器具ヲ成スニ至リシハ計ルベ

カラザル年數ヲ經過セルモノトス夫レ石ヲ投  
テ正鵠ヲ失セズ石片ヲ以テ器具ヲ成ス如キ手  
臂ハ妙用ヲ具フル人様獸類ハ單ニ工術ノ一點  
ヨリ之ヲ論ズルトモ、マタヨク習熟ニヨラバ凡  
ソ開明人民ノ造製スル物品ハ約子之ヲ作製シ  
得ベカラザルノ所以ナシ例ヘバ手臂ハナホ發  
音機關ノゴトシ此機關ノ猿類ニ於ケルハ種々  
ナル號鳴ヲ發シテ報知ヲ通ジ若クハ音樂ノ調  
子ニ諧ヘル音聲ヲ發スルガ如キニ止レリ然レ  
ド其人類ニ於ケルハ造構ニ異ナルトコロナシ



高蘊有脊骨  
動物解剖論第  
三卷第七十一  
葉ヲ見ヨ

ト雖モ、世々使用シタル成果ハ遺傳ニ由テ正シ  
キ言語ヲ發スルヲ得ルナリ、  
サテ人類ノ最近ナル戚族ニメ、而メ人祖ノ肖像  
ニ密似スル四手類ノ手ヲ觀ルニ、其造構一モ人  
類ニ異ナルトコロナシ、タゞ其用ニ限リアルノ  
ミ、且其行動ニ利便ナラザルハ迥カニ狗足ニ劣  
レリ、シニパンジ「ヲラング」等ハ行クニ掌邊若  
クハ指節ヲ以テセリ、以テ知ルベシ、然レモ木  
ニ攀ルガ如キニ至リテハ一方ノ大指ト一方ノ  
指掌トヲ以テセリ、其情宛カモ人類ノ然ルニ異

ナラズ、マダ或ハ罇餅ノ細頸ヲ以テ之ヲ口ニ致  
スガ如ク重物ヲ揚搬スルアリ、或ハ大猴ニ手ヲ  
以テ石ヲ反轉スルアリ、或ハ樹根ヲ穿ツアリ、或  
ハ大指ト他指トヲ以テ榛、栗、昆蟲、其他ノ小物ヲ  
撮取スルアリ、或ハ鳥巢ヲ侵シテ小卵雛子ヲ奪  
フアリ、或ハ亞米利加ノ猿類ニ野柑ヲ枝上ニ打  
チ皮殻ヲ破リ兩手ノ指ヲ以テ之ヲ開裂スルア  
リ、或ハ野猿ニ石ヲ以テ堅硬ナル菓實ヲ挫クア  
リ、或ハ左右ノ大指ヲ以テ双殼貝ヲ發開スルア  
リ、或ハ指ヲ以テ荆棘ノ身ニ附着セルヲ除去ス



⑤千八百六十九年四月刊行  
四季評論第三  
百九十二葉ヲ  
見ヨ

ルアリ、或ハ相互ニ寄生蟲ヲ狩ルアリ、或ハ敵ヲ見テ石ヲ落スアリ、石ヲ投ズルアリ、然レモ其行爲少シク迂遠ナリ、余ハ親シク目撃シタルアリ、リシガ、石ヲ投ズルモ未ダ精妙ナリトスル能ハズ、

猿類ノ諸物ヲ拿住スルハ其體裁甚ダ拙ナリ、因テ其手臂ナホ粗造ナルモ其用ヲナスヤ方今存スル手臂ニ異ナラザルベシトノ説アリ⑤、是レ太ダ信シ難シ、余ハ却テ以爲ラク若シ其樹上ニ攀ルノ障碍トナラズンバ、更ニ精妙ナル造構ノ

⑤貌廉動物略  
傳第一卷第五  
十節ヲ見ヨ

手臂コソ猿類ノ爲ニ緊要ナルベシト、然レ凡人類ノ如キ完全ナル手ハマタ樹木ニ攀ヅルニ便ナラザルニ似タリ、何ニトナレバ方今世界ノ諸部ニ存スル林生猿類ハ、亞米利加ノ「ア、テルス」、亞弗利加ノ「コロバス」、亞細亞ノ「ハイロベーツ」ノ如キ或ハ大指ヲ存セザルアリ、或ハヤ、其他指ニ網連スルアリ、四足恰カモ拿住ノ用ニノミ供スベキ彎鈎ノ如キモノニ過キザレバナナリ⑤、  
人體ノ直立セシ原由ヲ論ズ  
高等哺乳類中食物探索ノ方法ヲ改ムルカ若ク



同上同卷第  
八十節ヲ見ヨ

ハ。或ル他ノ事情ノ變ゼシヨリ漸次林中ヲ出デ  
生活ヲ他ニ移セシ者アリ、其以降行動ノ情狀ヲ  
一變シ、遂ニ或ハ四足類トナリ、或ハ二足類トナ  
ルハ區域ヲコロハニ濫觴セリ、大猴ノ如キハ常ニ  
丘陵崑野ヲ周遊シ、樹ニ攀ルヲ等ハ已ヲ得ザル  
ノ時ニ止レリ、故ニ其歩行ノ情狀犬狗ニ類ス  
ルヲ致セシナリ、獨リ人類ハ二足類トナレリ、其  
二足類トナリ身體ノ直立セルハ人體特質ノ一  
ニノ而シテ其此ニ至リシハマダ深キ故ナシトセ  
ス、夫レ人類ノ手ハ千變萬化ノ妙用ヲ備ヘ、ヨク

千八百三十  
三年刊行  
地窩得雜誌  
三十八葉中、手  
掌論ヲ見ヨ

心意ノ欲スルトコロニ隨ハザルナシ、人類若シ  
手ニ此妙用ヲ備ヘズンバ、天地間ニ在テ生物最  
高ノ現位ヲ占ルニ至リシト未ダ知ルベカラズ、  
查爾斯、白爾君ノ言以テ徵スベシ、曰ク、人類ハ  
手ノ普子ク機械トナリ、而シテヨク才能ト相變通  
シテ妙用極リナキハ人類ハ萬物ニ靈タル所以  
ナリト、然リト雖モ手臂ノナホ身體ハ支柱トナ  
リ、行動ノ機械トナリ、攀樹ハ要具トナルノ日ニ  
在テハ、其用未ダ武器ヲ製シ、石ヲ擲チ、矛ヲ放ツ  
ニ適セズ、マタ此手臂ヲ以テ身體ハ支柱トナシ、

人類論 卷二



行動ハ機械トナシ攀樹ハ要具トナス如キ粗暴  
 ハ行為ハ指頭ノ精妙ナル使用ニ欠クベカラザ  
 ル觸官ヲ害セリ是ヲ以テ二足類トナルハ人類  
 ノ爲ニ非常ノ利アリ且手臂ハ勿論腰部以上ハ  
 活動ノ自由ヲ占メ進退屈伸意ハ如クナラサレ  
 バ一事一行爲ヲ成ス能ハズ是レ人類ノ勢ヒ遂  
 ニ足立セザルベカラザルニ至リシ所以ナリ而  
 メ足首ハ廣大ヲ致シ大趾ハ形狀ヲ變ゼシ等ハ  
 ミナ此身體直立ヲ大成セシガ爲ハ主旨ニ出テ  
 かり、外足ハ拿住カヲ失セシ如キハ避クベカ

圖千八百六十  
 八年刊行哈客  
 爾氏造化史論  
 第五百七葉  
 人類ノ二足類  
 トノリシ所以  
 ニ係リ名論ア  
 リ○學士不西  
 拿人類ノ足ヲ  
 以テ拿住機ト  
 ナセシ珍シキ  
 例ヲ示セリ千  
 八百六十九年  
 刊行駝韻論考  
 第三百三十五葉  
 窩蘊氏マタ説  
 アリ有脊骨動

ラガハ結果ト謂フベシ夫レ手ノ愈拿握ヲ專  
 ラニスルヨリ足ノ愈身體支柱及ヒ運搬ヲ職  
 ルニ至リシハ動物普通ノ規則ニノ所謂體部  
 分業法ニ適ヘルモノナリ然レハ蜜民ニ未ダ足  
 ハ拿住カヲ全失セズナホ之ヲ以テ喬木ニ攀ガ  
 又ハ之ヲ他ニ使用スル者アリ  
 若シハ脚足ヲ以テ堅立シ手臂ニ自由ヲ與フ  
 ルハ人類ハ爲ニ利便ナルヲ營生戰ニ利ヲ得シ  
 一事ヲ以テモ明カナラハ愈此身體直立ヲ  
 全成シ二足類トナルハ人祖ノ爲ニ至利至便ナ

且論卷二  
 四十七



ル。以テ身ヲ警衛シ、畜類ヲ狩リ、食物ヲ覓ムル等  
ニ。適スルヲ致セシ如キハ、ミナ此ニ出デタリ、而  
ハ身體造構最モ其宜シキヲ得タル者ハ最モ久  
シキニ堪ヘ、最モ事ヲ成シ、最モ多ク生殘セシナ  
リ、然リト雖モ一朝「ゴリ」ラ及ビ其他二三ノ同類  
ノ全ク亡滅シタランニハ、論者ハ必ズ四足類ト  
ニ足類トノ間ニ存セシ獸類ハ何レモ行動ニ適  
セザリシト非常ナリ、因テ生物ノ四足類ヨリ二  
足類ニ遞進スベキ所以ナシトスベシ、然レモ爰

ニ宜シク察セザルベカラザルモノアリ、夫レ似  
人猿類ハ方今現ニ四足類ト二足類トノ間ニア  
リ、然レ其身體ハナホヨク其生途ニ適スルハ誰  
アリテ之ヲ疑フ者ナシ「ゴリ」ラハ行クニ前肢ヲ  
用フルトアリト雖モ、マタヨク踉蹌トノ立走シ、  
長臂猿ハ數、兩臂ヲ以テ二個ノ倚杖トナシ身體  
ヲ其間ニ運送シ、ハイロベトトノ一種ハ習ハズ  
ノ立走シ頗ル迅カナル者アリ、然レモミナ行歩  
拙劣ニシテ危險ナル趣向アルハ遠ク人類ニ若カ  
ザル所ナリ、之ヲ約スルニ、現存猿類ハ行歩スル



千八百七十  
二年刊行人類  
學評論附錄第  
二十六葉中博  
士貌路如尾脊  
推造構論ヲ見

情態ハ四足類ト二足類トハ間ニアリ、然レ公平  
ナル論者<sup>⑤</sup>ノ主張スル如ク、似人猿類ハ身體造  
構ヲ以テ四足類ニ類似スルヨリ更ニ二足類ニ  
密似セリ、

人體ノ直立セシヨリ生ゼシ變化ヲ論ズ  
人祖ノ身體益起立スルニ隨テ、手臂ハ益、拿住抱  
握等ノ器具トナリ、脚足ハ益、身體支柱及ビ行動  
ノ機械トナリタリ、故ニマタ身體造構ニ他ノ諸  
變化ヲ生ズベキハ勢ヒ自然ノ理ナリ、尻骨盤ハ  
廣大ヲ致シ、脊骨ニ奇異ナル屈曲ヲ生シ、頭顱ハ

千八百六十  
八年十月印行  
人類學評論第  
四百二十八葉  
譯述セル體  
體古形論〇マ  
タ千八百六十  
六年刊行、高橋  
氏有脊骨動物  
解剖論第二卷  
第五百五十一  
葉ヲ見、

位置ニ變態ヲ來セシ如キハミナ身體ニ於ケル  
影響ナリ、博士書方仙<sup>⑥</sup>ハ人體ハ乳房狀ヲ成シ  
タルハ、即チ身體直立ハ結果ナリトイヘリ、チ  
ン<sup>⑦</sup>グ<sup>⑧</sup>シ<sup>⑨</sup>ン<sup>⑩</sup>パン<sup>⑪</sup>シ<sup>⑫</sup>等ニ於テハ頭顱未ダ乳房狀  
ヲナサズ、ゴ<sup>⑬</sup>リ<sup>⑭</sup>ラ<sup>⑮</sup>ニ至リテハ微ニ其狀アリト雖  
モ人類ニ於ケルヨリ特ニ瑣少ナリ、其他人類ノ  
立體トナリシヨリ生ゼシ變化ハ勝テ算フルニ  
違アラズ、總テ此ノ如ク扈屬シテ生ゼシ變化ハ  
或ハ天然撰擇ニ出ルモノアリ、或ハ世々使用多  
端ノ結果ニ係ルアリ、或ハ甲部ヨリ乙部ニ感觸



セシ影響ニ歸スルアリ、其區域ヲ審定スルハ得  
テ難シトス、マタ數此等ノ諸因ノ相連合シテ一  
種ノ變化ヲ生ズルアリ、或ル種類ノ筋肉ト其附  
著スル骨冠ト平日ノ使用ニ依テ強大ヲ成ス者  
アルガ如シ、是レ即チ變化ノ幾分カ日々ニ漸成  
シ、且其利用ノ幾分モ亦日々ニ實果ヲ結ビシ者  
ナリ、是故ニ變化ヲ生ズルノ最モ勝レタル者ハ  
生殘スル者最モ多キニ居ル、

牙ノ衰微セシ所以ヲ論ズ

一ハ以テ人體直立ノ原因ニメ、一ハ以テ人體直

立ノ成果ナル手臂ノ妙用窮リナキハ、マタ間接  
ニ他ノ變化ヲ身體ニ致セリ、既ニ論ズル如ク人  
祖ノ男性ハ固ヨリ牙ノ大ナルヲ存セシ者ナリ、  
然レモ其習慣ヲ變ゼシ以來仇敵ト争フハ際石  
塊、椎、棍、兵器ヲ使用スルニ至リシカバ遂ニ顛齧  
齒、牙ヲ廢スルニ及ベリ、是故ニ顛齧齒、牙ハ漸  
ク其形狀ヲ衰小セリ、其所以ハ類似ノ諸件ニ明  
カナリ、マタ下編ニ至リテハ密ニ符合スル諸例  
ヲ以テ之ヲ説明スヘシ、男性及嚙類ノ牙ハ衰滅  
スルニ隨テ其角ノ暢發セルアリ、馬ノ牙ハ衰滅



⑤千八百六十八年印行駝韻論評第五十七節

爾知彌亞及ビ其他ノ者ノイヘル如ク⑤男性似人猿ノ成壯ニ達セシ者ハ頭形ヲ以テ人類ニ異ナリ其容貌大ニ恐怖スベキ所アリ是レ顎筋ハ暢發セルヨリ頭顱ニ生ゼシ結果ナリ故ニ人類ノ祖先ニ於テモ其成年ハ頭形ハ愈現形ニ類似セルハ愈其顎齒ハ衰小セル日ニ在リシモハトス男子ノ牙ノ衰小スルニ隨テ其影響ノ終ニマ

夕女子ノ齒ニ及ビシヤ明ケシ其所以ハ之ヲ下編ニ述ブベシ、

頭顱ノ大ヲ増シ形ヲ變ゼシ所以ヲ論ズ各種ノ心能ノ暢發スルニ隨テ腦漿ハマタソノ大ヲ増セリ故ニ人腦ノ大ノ人體ニ於ケル比例トゴリラ若クハ「ラング」ノ腦大ノ其體ニ於ケル比例トヲ照較スルニ人腦ハ大ハヨク其心能ハ優高ナルニ符ヘリ且之ヲ昆蟲ニ徵スルニ蟻及ビ其他ノ四翼蟲類ハ約テ大ナル纈系筋ヲ有シ之ヲ甲蟲ノ如キ心力ノ劣レル者ニ比スレバ

類論 卷二 五十一



④千八百五十年印行地若丁博物學年表第三編第十四卷動物部第二百三葉及千八百七十年印行魯雲氏「スル」ガミトリ「解」剖及性理論第十四卷ヲ見ヨ

殆ンド數倍セリ⑤然リト雖モ二匹ノ動物ナリ、二人ノ人類ナレ其腦漿ノ立方積ヲ以テ其心力ヲ精測スル能ハズ、動モスレバ腦漿ノ小ナル非常ニ出ルモ却テ心力ノ強大ナルマタ非常ニ出ルアリ、蟻ハ本性、心力、情愛ノ機活ナルヲ以テ人ヲメ感動セシムルモ、ナホ其纈系筋ハ小ニノ嬰粟ノ四分一ニモ及バズ、此ニ由テ之ヲ觀レバ、蟻ノ腦漿ハ宇宙間ニ存スルトコロノ至奇至妙ナル物質ノ一ニノ、其最微分子ノ如キハ或ハ人腦ノ右ニ出ルモノナランカ、

④千八百六十九年印行、理學雜誌第五百十三葉、  
 ⑤千八百七十三年印行、人類學評論中、貌路加氏撰擇論、千八百六十四年印行、英譯薄額的氏人類論第八十八第九十葉ノ引用、及千八百三十八年印行、普理加德人體沿革史第三百五葉ヲ

人腦ハ大小ト人智ハ開否ト符合スル所以ハ頭顱ヲ以テ蠻野ハ人民ト開明ハ人民トヲ比較シ、古代ハ人民ト今代ハ人民トヲ比較シ、加ハルニ有脊骨全種ハ類例ヲ參考スレバ、マタ太ダ分明ナリ、學士婆奈德大木ノ⑥研究セシ所ニ據レバ、歐洲人ノ頭顱ハ平均シテ其内部ニ九二三立方英寸ノ空處アリ、亞米利加人ニ於テハ此空處ハ七五ニノ、亞細亞人ニ於テハ八七一アリ、濠洲人ニ於テハ八八ニ、九ナリ、博士貌路加⑦嘗テ二種ノ頭顱ヲ檢察セシニ、巴理ノ南部埋葬地ヨ



見ヨ、  
 ◎同上論文中  
 貌路加氏ノ説  
 ニ據レバ、開明  
 セル人民ノ頭  
 殻ハ平均シテ  
 其度量ヲ減セ  
 リ、是レ人民開  
 明ニ至レバ漸  
 ヤク慈善ノ道  
 立チ、爲ニ未開  
 ノ日ニ在テハ  
 除去セラルベ  
 キ如キ心身ノ  
 柔弱ナル者ト  
 雖モ保存セラ  
 レ、而メ野蠻ノ

リ出シ第十九回百年代ニ屬スル髑髏ハ、或ル洞窟ヨリ出シ第十二回百年代ニ屬スル者ニ比スレバ、其大ナルヲ千四百八十四ノ千四百二十六ニ於ケルガ如キ比例ヲナセリ、且此増大ハ實測ニヨルニ全ク髑髏ノ前部ニノ所謂智能ノ屬スルトコロナリ、普理加徳ハ古今英國人民ノ髑髏ヲ比較シ、今代ニ屬スルモノヲ以テ甚ダ大ナリトセリ、然レモ遠キ上代ノ髑髏中ニモ、ニ安德撒ヨリ出シ名高キ髑髏ノ如クヨク暢發シテ濶大ナルモノアリ、◎獸類ニ就テハ拉耳埵的氏◎ヨ

人民ニ在テハ  
 却テ強壯ニシ  
 非常ノ艱難ヲ  
 忍フ者其過半  
 ニ居ル所以ナ  
 リト云ス、因テ  
 バタ往古羅塞  
 耳ニ在リシト  
 ログロダイツ  
 種族ノ頭殻ハ  
 概シテ今代佛  
 蘭西人ヨリ遙  
 カニ大ナル所  
 以ノ奇事ヲ解  
 セリ、  
 ◎千八百六十  
 八年六月一日

クコ、ニ及ビ哺乳類ノ第三期地層ニ屬スルモノト其第一期即チ今代ニ屬スルモノトヲ比較セシガ、今代ニ屬スルモノハハタ均シク腦漿ハ大ニメ、其迂曲ハ精妙ナルヲ存セリ、然レモタ之ト少シク異ナルモノアリ、余既ニ之ヲ他ノ書ニ論述セシガ、◎家生兎類ノ腦漿ハ却テ減衰シ、野兎ノ腦漿ヨリ甚ダ小ナルニ至レリ、是レ他ナシ數世小籠ハ中ニ閉居セルヨリ卒ニ亦智ヲ研キ、本性ヲ用ヒ、五官ヲ使ヒ、活動ヲ做ス、下減少セシ所以ナリ、

且論卷二 五十三



印行學術新報  
 養馴動植變  
 進論第一卷第  
 百二十四葉ヨ  
 リ第百二十九  
 葉ニ至ルヲ見  
 ヲ

人類ノ腦漿及ビ髓液ハ重量ハ増加セシハマ  
 之ヲ支フル脊骨ハ暢發ヲ促シ殊ニ人體起立ハ  
 際ニ在テ其然リシハ毫モ疑ナシ且腦漿内部ハ  
 歴カハマタ此體形ハ變化ニ乘シ頭形ニ影響ヲ  
 與ヘシモハ、如シ蓋シ其容易ニ然ルベキ所以  
 ハ之ヲ數件ノ實事ニ徵セリ人類學者ノ說ニ據  
 レバ頭形ノ變ゼシハ小兒ノ搖籃ニ於ケル如キ  
 事情ニ出ルトイヘリ抽筋ハ常患トナリ又ハ甚  
 ダシキ火傷ハ癩痕トナリシハ永ク面骨ノ體裁  
 ヲ變ゼリ且疾病ノ爲ニ小兒ノ頭顱ヲメ或ハ横

百八十六  
 年十月刊行  
 人類學評論第  
 四百二葉中書  
 方仙ノ說ヲ見  
 ヲ○學士若勞  
 土ハ造靴職ノ  
 如キ業ヲ營ム  
 者ハ平生其頭  
 顱ヲ前ニ垂ル  
 ヲ以テ額形  
 ヲ圓大ニシ且  
 之ヲ前ニ突出  
 セシムトイヘ  
 リ

向ニシ或ハ空向ニシ以テ長ク寐子シメシヨリ  
 兩眼ノ中孰レカ其位置ヲ變ジ若クハ腦漿壓力  
 ノ方向ヲ轉ゼシヨリ頭形ニ變化ヲ生ゼシモノ  
 アリ○長耳兎ハ一方ハ耳ヲ前面ニ垂レシムル  
 ハ如キ瑣小ノ原由アリテ其一方ハ頭骨ヲ前部  
 ニ傾ケシヨリ之ヲ遂ニ他ハ一方ハ頭骨ト同  
 一ナル形質ヲ失ハシメタリ總テ動物ハ其何種  
 タルヲ問ハズ身體ニ大小ヲ致シ而シ心カニ増  
 減ヲ生ゼザルカ又ハ心カニ増減ヲ生シ而シ身  
 體ニ大小ヲ致サレバ必ズ其頭形ヲ變ズルニ

組論卷二  
 五十四



養馴動植變  
進論第一卷第  
百十七葉及ビ

至レリ、是レ余ガ家兎ニ就テ實察スル所ナリ、其  
一種ハ野生ヨリ甚ダ大ナルニ至リ、他ハ一種ハ  
殆ド同形ヲ保テリ、而ルニ兩種トモ身體ニ大  
ヲ致セシ割合ニ比スレバ非常ニ腦漿ヲ减小セ  
リ、故ニマタ其餘影ハ頭顱ニ延及セシモノアリ  
其形ミナ變ジテ長大ヲ成セリ、余始メテ之ヲ一  
目セシ片ハ實ニ怪シムニ堪ヘザリキ、例ヘバ一  
ハ野生一ハ家生ノ種ニテ殆ンド同幅ナル二個  
ノ頭顱ニシテ、其長始ニ於テハ三英寸及ビ〇一五  
トナリ、終ニ於テハ四英寸及ビ〇三トナリタリ、

第百十九葉ヲ  
見ヨ

千八百六十  
八年十月刊行  
人類學評論第  
四百十九葉中  
書方仙ノ引用  
ニ據ル

全一タ各種ノ人類中顯然タル性質ノ一ハ頭顱  
ノ變形ナリ、或ハ其長キモノアリ、或ハ其圓キモ  
ノアリ、是レマタ彼ノ兎類ト其理由ヲ同ウスル  
モノ、如シ何ニトナレバ維爾加ノ發見ニ據ル  
ニ、身長ノ短ナル者ハ頭顱ノ横大ニシテ、身長ノ長  
キ者ハ頭顱ノ縦長シ、而シテ身長ノ長キ者ハ長  
大ナル家兎ニ似タリ、長大ナル家兎ハ總ジテ頭  
顱ノ長形ナルモノナレバナリ、  
以上ニ論ズル所ハ人類ハ身體ハ長大ヲ致シ頭  
顱ハ圓形ヲナセシ所以ヲ詳カニセリ、而シテ此等



ハ實ニ人類ノ獸類ニ異ナル所以ハ最モ著シキ  
モハナリ、

人類ノ赤身ナル所以ヲ論ズ

更ニ人類ノ獸類ニ異ナリトスベキハ皮膚ノ露  
出セルニ在ルガ如シ、然リト雖モ鯨、白鯨、牛面魚、  
河馬ハ如キモノハ、夕ニ赤身ナリ、而シテ此ノ如  
キハ却テ其水中ヲ游泳スルニ便ナルトコロア  
リ、加フルニ寒水ニ生活スルモノハ厚臙ノ之ヲ  
被フアリ、以テ彼ノ海狗、海獺ノ毛衣ニ於ケル如  
キ用ヲ成シ、而シテ赤身ニシテ體温ヲ散失スルモ決

高蘊有脊骨  
動物解剖論第  
三卷第六百十  
九葉ヲ見ヨ

メ傷害トナル患ナシ、犀ト象トマ、殆ハ赤身  
ナリ、之ニ反シテ往昔北極地方ニ生活セシ動物  
ニモ既ニ其種類ノ凶失セシモノアリ、此等ハミ  
ナ長毛ヲ以テ身ヲ被ヘリ、然レバ則チ犀象等ノ  
赤身ナル如キハ温熱ノ爲ニ其毛衣ヲ脱失セシ  
モノニ似タリ、蓋シ印度ノ高燥冷涼ナル地方ニ  
生活スル象ハ之ヲ低濕嚴熱ナル地ニアルモノ  
ニ比スレバ非常ニ多毛ナリ、是ニ由テ之ヲ觀  
レバ人類ノ毛衣ヲ脱失セシモ或ハ上古熱帶地  
方ニ生活セシ所以ニアラザルヲ得ンヤ、且マ夕



④千八百五十九年刊行博物學大意第二卷第十五葉ヨリ第  
 二百七十七葉ニ至ル以西德鏡弗禮ノ説ヲ見ヨ、  
 ⑤千八百七十四年刊行、尾加の松及亞博物志

人類ノ毛衣ヲ脱失セシハ人體ノ直立セシ以前ニ在テ、方今長毛ノ留存スル男子ノ胸部、面部及ビ男女ノ四肢ノ軀幹ニ接續スル部分ノ如キハ當時太陽ノ熱ニ曝露セザリシ故ヲ以テ然ルニ似タリ、然リト雖モ、若シ果シテ然ラバ、頭頂ハマタ不思議ナリトイフヘシ、本部ハ常ニ太陽ニ曝露セシ部分ナレバ固ヨリ毛髮ノ存スベキ所以ナシ、然ルニ却テ之ニ富ノリ、④是ハ人類ハ赤身トナリシ原由ヲ以テ太陽ノ熱ニ歸スルハ説ト矛盾セリ、白耳的氏以爲ラク、⑤熱帶地方ニ於テ

第百九葉及ビ千八百七十四年刊行、田原氏編輯總督府雜錄第一卷第四百四十葉ヲ見ヨ、

毛髮ノナキハ人類ノ爲ニ益アリ、何ニトナレバ此地方ノ住民ハ多ク狗蠅其他ノ寄生蟲ニ惱マサレ、屢瘡瘡ヲ患フルモノアリ、因テ毛髮ナクンバ則チ此等ノ患ヲ免カル、ニ至ルベシト、然レバ此一條ハアルヲ以テ人類ハ天然ハ撰擇ニ出デ、赤身トナリシ者ナリト臆斷スルハ、マ余ガ肯テ取ラザル所ナリ、且古今熱帶地方ノ四足類ヲ歴觀スルニ未ダ一モ此患ヲ除去スルノ便宜ヲ得タル者アルヲ知ラズ、然リ而メ其然ル所以ニ就テハ蓋シ説アリ、人類トイヒ殊ニ婦女ニ毛

人祖論 卷二 五十七



髮ノ少ナキハ全ク粧飾ノ主旨ニ出デタルヤ明  
カナリ、其詳細ハナホ之ヲ男女相互ノ撰擇ト題  
セル條下ニ討論スベシ、抑男女相撰ノ主義ニ據  
レバ、高等哺乳類ノ中、人類ト人類以下ノ動物ト  
毛髮ニ係リ大ニ異ナルトコロアルハ敢テ訝ル  
ニ足ラズ、男女相互ノ撰擇ニ由テ來セシ性質ハ、  
總シテ密接ナル有親ハ生物ト雖モ、往々不同ハ  
非常ナルモノアレハナリ、

人類ノ尾ヲ失セシ所以ヲ論ズ  
通俗ノ說ニ據レバ人體ニ尾ノナキハ抑人類ノ

獸類ニ異ナル一大區別ナリトイヘリ、然リト雖  
モ、生物ニ尾ハ無キハ獨リ人類ニ止ラズ、猿類中  
人類ニ密似スル者アリマタ之ヲ欠ケリ、其長短  
ハ如キニ至リテハ同種ハ生物ト雖モ其不同ハ  
甚ダシキ者アリ、  
マカカスノ一種ハ全身ヨリ長  
キ尾ヲ有セリ、其尾脊椎二十有四ノ大數ニ及ベ  
リ、他ノ一種ハ其尾漸ヤク四脊椎ヲ以テ成リ、其  
短カキテ殆ンド之ヲ見ルニ苦メリ、  
マブーンノ  
一種ニ其尾長クシテ尾脊椎二十有四ヲ含メル  
アリ、而メ其一種ナルマンドリルノ尾ハ甚ダ短



④千八百六十  
 五年印行動物  
 學社報告第五  
 百六十二葉及  
 ⑤第五百八十  
 三葉中仙慈日  
 美婆的氏英國  
 博物館目錄體  
 骨ノ條下額禮  
 氏有脊骨動物  
 解剖論第二卷  
 第五百十七葉  
 中窩臨氏及ビ  
 博物雜誌第三  
 卷第二百四十  
 四葉中以西德  
 饒弗禮ノ説ヲ

縮セル小尾脊椎十箇ヨリ成レリ、久未ニ據レバ  
 ④或ハタゞ其五箇ナルモアリトイフ、約テ尾ハ  
 長短ニ係ラズ益、末端ニ至レバ益、尖圓ヲ成セリ、  
 是レ即チ其不使用ニ屬シ、端筋、動脈、神系ノ衰弱  
 セルヨリ、終ニ極端ノ尾脊椎ヲメ衰瘠セシメタ  
 ル所以ノ結果ナリ、今其長短ヲ致セシ原由ハ姑  
 ラク之ヲ舍キ、先ヅ全尾ハ落失セシ所以ヲ講究  
 セント欲ス、抑近來博士貌路加④ノ論ズル所ニ  
 據ルニ、凡ソ四足類ノ尾ニ本、端ノ二部アリ、而メ  
 其分界甚ダ明瞭ナリ、即チ其本部ハ中ニ髓路ヲ

見ヨ、  
 西千八百七十  
 二年刊行人類  
 學評論中尾脊  
 推造構論

具ハ外ニ凹凸ヲ成ス、其狀一モ通常脊椎ニ異ナ  
 ルトコロナキ完全ナル尾脊椎ヲ以テ成リ、其端  
 部ハ髓路ヲ具ヘズ、平滑ニメ更ニ通常脊椎ニ類  
 似スルトコロナキモノヲ以テ成レリ、然レ尾ハ  
 人類及ビ似人猿類ニ於テハ敢テ外形ニ見ヘザ  
 イ、其其實ニ生物トモ明カニ之ヲ存セリ、加之其  
 造構同ジク一ノ模型ニ由レリ、人類ニ在テハ尾  
 ノ端部ニ於ケル尾脊椎ハ即チ尾龍骨ヲ成セリ、  
 然メ其形其數ノ衰小セルヲ以テモ一ノ不具物  
 タルハ論ヲ俟タズ、其本部ニ於ケル尾脊椎ハ其

大組論 卷二 五十九



數漸ヤク二三ニノミナ縮結シ、而メ其暢發モ一  
 タ停住セリ、但シ他ノ獸尾ノ同部分ニ於ケルヨ  
 リモ、其幅タルヤ遙カニ大ニメ、其平狀ヲ成スヤ  
 遙カニ潤ナリ、之ヲ名ヅケテ薦部所屬ノ脊椎ト  
 イヘリ、其用專ラ體ノ内部ヲ支ヘ、其他ナホ種々  
 ノ緊要ナル効用アリ、而メ其形狀ニ來セル變化  
 ハ實ニ人類ノ立體トナリ、似人猿類ハ半立體ト  
 ナリシ所以ニ出デタリ、貌路加氏ハ向ニ異說ヲ  
 唱ヘシカド方今之ヲ改新セシ人ナレバ、此說ノ  
 如キハ殊ニ據ルベキアリ、人類及ビ高等猿類ノ

本部尾脊椎ノ變ゼシハ或ハ直接或ハ間接ナル  
 モ要スルニミナ天然ノ撰擇ニ由ラザルハナシ、  
 夫レ尾龍骨ハ正シク尾ニメタリ、其不具物ニ過  
 ギザル所以ハ明瞭ナルニ至リテハ復タ何ヲカ  
 云フベケンヤ、然レモ尾ノ外部ニ在リシ部分ノ  
 悉皆落滅セシハ摩擦ニ由テ然ルニ至レリトノ  
 說ハ往々之ヲ一笑ニ付スル者アリ、惟ハザルノ  
 至リナラズヤ、世ノ人忽チ之ヲ聞キナバソレ或  
 ハ然ランモ、少シク之ヲ思察セバ、輒チ容易ニ其  
 理由ヲ觀シ、學士安德爾遜<sup>(四)</sup>ハ殊ニ之ヲ研究シ

千八百七十  
 二年刊行動物  
 學社報告第二  
 百十葉

組論 卷二 六十一



タリシガ、ゴカカス、ブランニースノ非常ナル短  
尾ハ根底ニ埋没セルモノヲ合セタゞニ十一個  
ノ尾脊推ヲ以テ成レリ、殊ニ其極端ハ肉筋質ニ  
ノ脊推ナク之ニ次ク部分ハ不具ナル尾脊推五  
個ニメ其長英法一分五厘ヲ出ズ、且此非常ニ短  
小ナル部分ハ常ニ偏曲シテ鈎形ヲ成セリ、尾ノ  
本部ハ漸ヤク四個ノ小脊推ヲ以テ成リ、其長英  
法一寸強ニスギザルモノナリ、此猿類ハ歩行ス  
ル際必ズ此短尾ヲ樹立シ、以テ全長殆ンド四分  
ノ一ヲ常ニ左ニ曲折セリ、而メ此曲折セル部分

ハ尻脰上部ノ罅隙ヲ填塞スルガ故ニ其坐スル  
片ハ必ズ膝下ニ藉カレ竟ニマタ外面ノ硬粗ヲ  
成シタリ、學士安德爾遜視察ノ大意ヲ約シテ曰  
ク、此等ハ實事ニ一ハ理由アリ、即チ此猿尾ハ短  
小ナリト雖モ猿類ハ通情トシテ其坐スル片ハ必  
ズ之ヲ膝下ニ藉ケリ、而シテ其脰外ニ出デザルヲ  
以テ之ヲ考フハ、此猿尾ハ圓曲シテ脰隙ニ入  
ルハ其坐下ニ藉カルハ、際尻脰ト大地トハ間  
ニ壓抑セラルハ、免カレハガ爲ニ、即チ其故  
意ニ出デタルモハ、如シ、而シテ其終ニ圓曲ハ性



④千八百七十  
二年刊行、動物  
學社報告第七  
百八十六葉

④養馴動植變  
進論第二卷第  
二十一葉ヨリ  
第二十九葉ニ  
至ルヲ見ヨ

ヲ成スニ至リシ所以モ、タコハニアリ然レバ  
則チ其外面ハ硬粗ヲ成セシ如キハ敢テ怪シム  
ニ足ラズト、學士謨里⑤ハ廣ク生物園ニ遊ビ同  
種ノ生物ヲ查覈シ并ビニ其尾ノ少シク長キ類  
似物ヲモ檢察セシニ、此等ハ三ナ坐スルハ必  
ズ其尾ヲ臀側ニ卷轉セリ、因テ長短ニ係ラズ其  
根本ハ摩擦ヲ免カレザル者ナリトイヘリ、夫レ  
身體ノ一部ヲ割去スル片ハ其成果屢遺留スル  
アリ⑥其證少シトセズ、故ニ短尾猿類ハ尾ハ如  
キ固ヨリ不用ニ屬スレバ益摩擦ヲ經益衰耗シ

終ニ微々タル不具物トナリシハ免カルベカラ  
ザルハ勢ヒトイフベシ、カカス、ブ、ラ、ン、ト、ス、  
ハ微小ナル尾ハ如キハ即チ此理ニ由レリ、而  
マカカス、イ、コ、ト、ダ、ヒ、ト、ス、及ビ其他高等猿類ニ  
於テ全尾ハ欠落セシ所以モ、マ、タ、コ、ハ、ニ、出、デ、タ、  
ルヤ必セリ、然レバ則チ深ク之ヲ推究スルニ人  
類及ビ似人猿類ニ於テ全尾ノ落失セシ所以モ  
他ナシ、其端部ハ世々外物ニ接觸シテ害セラレ  
本部ハ减小轉衰シテ或ハ半立體或ハ全立體ト  
ナリシ事情ニ適應スルヲ致セシモノナリ、



天撰ノ境域ハ未ダ遠カニ定ムベカラザ  
ル所以ヲ論ズ

人類ノ特有スル性質ノ由テ來リシ方法ハ、或ハ  
直接天撰ナルアリ、或ハ間接天撰ナルアリト雖  
モ、之ヲ要スルニ、天然ノ撰擇ニ由ラザル無キ所  
以ハ、既ニ之ヲ明論セリ、然リト雖モ更ニコ、ニ  
述フベキモノアリ、抑身體造構ニ生ゼシ變化ノ  
未ダ生物ヲノ風俗習慣若クハ衣食住其他生路  
ノ境遇ニ適セシムルノ用ヲ成サザルモノハ、天  
然ノ撰擇ニ由ラザルモノ、如シ、然レモ敢テ何

等ハ變化ハ極メテ生物ニ有用ナルモハ、何  
等ハ變化ハ極メテ之ニ無用ナルモハ、ナリトハ  
得テ之ヲ斷言スベカラズ、何ニトナレバ、體部ノ  
使用ニ係リ人智ノ及フトコロ殊ニ限リアリ、苟  
モ身體ヲ以テ氣候ノ變化食物ノ更替ニ適應セ  
シメント欲スレバ、其血液ノ成立肉網ノ組織ニ  
係リ何等ノ改變ヲ要スベキヤハ得テ知ル能ハ  
ザレバナリ、マタ連發變化ノ主義モ忽視スベカ  
ラズ、既ニ以西德饒弗禮人類ノ例ヲ以テ講究セ  
シ如ク造構ノ奇異ナルモノ多ク此主義ニ由テ



養馴動物  
進論第二卷第  
二百八十一葉及  
二百八十二葉  
見ヨ

解スルヲ得ルアリ、連發主義ニ係ラズ一部分ノ  
變化シテ他ノ部分ノ使用増減セルヨリ更ニ之  
ニ不意ハ變化ヲ致スモアリ、毒蟲ノ爲ニ五倍子  
ノ如キモノ多ク植物ニ生ジ、又ハ某種ノ魚類ヲ  
食シ若クハ蝦蟆ノ毒ニ感ゼシ鸚哥ノ羽色ニ變  
化ヲ生ズル如キ種類ハ變化モアリ、<sup>⑤</sup>是等ハ身  
體血液ノ故アリテ變ズル所ハ隨テ他ニ影響ヲ  
與フル所以ノ理ヲ明カニセリ、其他變化ノ一タ  
ビ生ジテヨリ古來陸續トメ有用ノ目途ニ適セ  
シモノハ已ニ一定ノ造構トナリヨク遺傳スル

モアリ察セザンバアルベカラズ、  
此ハ如クニ説キ去レバ則チ天然撰擇ハ直間兩  
接ニ結果ヲ生ズルヤ甚ダ廣シ、故ニ其境域ハ如  
キハ未ダ遠カニ定ムベカラザルモハアリ然リ  
ト雖モ頃者拿日黎ノ植物論博士貌路加ノ動物  
論其他諸家ノ論説ヲ一讀シ、熟以爲ラク生物祖  
宗論ノ初出數版ニ於テ余ガ論ズル所ハ天然撰  
擇即チ最適物生殘ノ主義ニ歸スルヲ多キニ過  
ギタリト、因テ其第五版ニ於テハ大ニ之ヲ訂正  
シ、此説ヲ以テ解明ヲ爲スモノハ專ラ造構ノ改

且論卷二  
六十四



進シタル變化ニノミ限レリ、然レモマタ僅カニ  
二三年來ハ、閱歴ニ據レバ、方今殆ント不用ハ造  
構ニ似タルモ、後來有用トナルベキ所以ヲ審カ  
ニスルモハ往々コレアリ、是等ハ所謂天然ノ撰  
擇ニ由ラザルヲ得ザルナリ、然リ而メ向ニ論ズ  
ル所ハ造構ノ未ダ有益トモスベカラズ、マタ有  
害トモナスベカラサルモノニ及バザリキ、是レ  
該書ニ於ケル一大遺漏トイフベシ、然レモコ  
ニマタ其然ルヲ致セシ所以ノモノ無キニアラ  
ズ、抑該書ヲ著スニ方テ余ガ胸中ニ二條ノ主見

アリ第一ニ、生物ハ各特殊ハ創造ニ係ラサル所  
以ヲ詳カニセント欲シ、第二ニ、假令習慣ハ結果  
及ビ境遇ハ影響アリテ大ニ之ヲ佐成シタリシ  
ト雖モ、天然ハ撰擇ハ抑生物遞進ハ主因ナル所  
以ヲ明カニセント欲セリ、然リト雖モ、彼ノ生物  
ハ各特殊ノ創造ニ係ルノ說當時殆ンド天下ニ  
洽子クシテ、而メ余モマタ曾テ之ヲ篤信セシ者  
ナレバ、奈何トモ舊見ヲ蟬脱スル能ハズ、タミニ  
以爲ラク不具ノ部分ヲ除キ、其他各部ノ造構ハ  
其理由ノ明否ヲ問ハズ、ミナ以テ有用ナリト、ソ



レ此ノ如キ思想ノ懷裡ニ存セシハ古今天然ノ  
撰擇ニ係ル變化ヲ論ジ長密ニ涉リシ所以ナリ、  
世間或ハ人アリ、生物遞進ノ説ヲ容レ、ナホ未ダ  
天然撰擇ノ主義ヲ取ラズシテ妄リニ余ガ説ヲ  
駁スルハ、該書ノ著述ニ係ル前顯二條ノ主見ヲ  
領セザル所以ナリ、蓋シ天然ノ撰擇ヲ論シ余ハ  
決シテ適度ヲ越エ甚大ニ失スル所アルヲ知ラ  
ズ、然リト雖モ若シ或ハ然ルアラバ、是レ即チ論  
勢ノ制スベカラザル所ニシテ、而メ彼ハ生物ヲ  
以テ特殊ハ創造ニ歸スルハ、僻見ヲ一洗スルニ

至リテハ其功却テ大ナリトハフベシ、  
人類ハイフニ及バズ總ジテ有生物ノ身體ニ奇  
異ノ造構アリ、古來未ダ曾テ一用ヲ成ササルヲ  
以テ生理上ノ論點ヨリ見ルニ全ク無用ノ部分  
ナルニ似タリ、マタ生物ニ各自個々ノ小異ヲ致  
ス無數ノ變化ノ未ダ其原由ヲ審カニセザルモ  
ノアリ、彼ノ復古造構ノ如キハタゞニ一歩ヲ進  
メ以テ此等ノ箇條ヲ推究スルニ過キザルモノ  
ナリ、所謂奇異ハ造構ハ確乎タル原由ナカルベ  
カラズ、然ハ此原由ハ其何物タルヲ問ハズ多年



ハ間ヨク強大ハ勢カヲ有シ苟モ一定ハ方向ニ  
由ラバ其結果ハタトヒ生理上有用ハモハトナ  
ラザルモ顯然タル變化ヲ致シ敢テ目今ハ如キ  
各自ハ小異ヲ成スニ止ルベカラザルヤ必セリ  
且造構ノ變ジテ有害トナリシモノハ天然ノ撰  
擇ニ由テ漸次消滅ニ屬スベキモ有益トナラザ  
ルモノハマタ天然ノ撰擇ニ由テ永ク之ヲ一定  
不變ニ保續スル能ハズ然リト雖モ生物ノ性質  
ヲ一定不變ナラシムルハ之ヲ誘發スル原由  
ノ劃然トメ一定不變ナルト生物各自ノ異種配

合ノ自由ニメ偏頗ナラザルトニ在リ然レドマ  
タ數世代ノ長キニ在テハ一種ノ生物ニ此ノ  
如キ事情ニ屬シナホ數變化ヲ累經スルアリ但  
シ此等ノ變化ト雖モ固ヨリ彼ノ原由ト彼ノ自  
由トノ存在スル間ハ一定不變ニ保續セリ此原  
由ハ未ダ審カナラザレバ彼ハ偶然變化ニ於ケ  
ルガ如ク境遇ハ性質ニ屬スルヨリハ寧ろ變化  
スル其生物ノ體質ニ密接セルハ甚ダ明晰ナリ  
天然撰擇以下ヲ結論ス  
現今人類ノ多少變化シテ常ニ同ジカラザルハ



猶他ノ諸動物ニ於ケルガゴトシ、故ニ人類ノ祖  
 先モマタ此ノ如キモノナルハ疑ナシ、前諸條已  
 ニ之ヲ詳論セリ、然リ而、此變化ヲ來タス原由  
 ト之ヲ管理スル規則トニ至リテハ、マタ少シモ  
 古今ノ異ナル所ナキナリ、總シテ動物ハ急カニ  
 繁殖シ、以テ生計ヲ聊シズル能ハザルニ至レリ、  
 人類ノ祖先モマタ然リ、故ニ營生ノ争鬪ヲ生ジ  
 遂ニ天然ノ撰擇ニ馴致セシハ、明カナリ、而メ天  
 然ノ撰擇ハ習慣ノ結果ニ補助セラレ、恆ニ營生  
 ノ争鬪ト相資シテ、以テ其功ヲ成セリ、マタ男女

相互ノ撰擇ニ由テ區々タル變化ノ人類ニ生ゼ  
 シモノアリ、其他コ、ニ解明ヲ省略セル變化ニ  
 ノ未詳原由ノ一定ナル行爲ニ係ルモノアリ、按  
 ズルニ此原由ハ即チ數家生動物ノ身體造構ニ  
 非常ノ變化ヲ生ズル所以ノモノニ異ナラザル  
 ベシ、

野蠻ノ人民殊ニ四手類ノ風俗ヲ察スルニ、元始  
 ノ人類且猿様人祖ノ如キモ恐ラクハ社會ヲ成  
 シテ生活セシモノナリ、蓋シ真ニ社會ヲナセル  
 親睦動物ニ於テハ、天然撰擇ハ屢各自ハ生物ニ



及ボシ之ニ由テ一社會ノ公益トナル變化ヲ保  
存スルコトアリ、譬ヘバコ、ニ一社會アリ稟賦完  
全ナル者ノ多數ヨリ成リタランニハ、縦ヒ其長  
處本社中ニ利スルトコロナキモ之ヲ他ノ稟賦  
不完全ナル者ノ多數ヨリ成ル社會ニ比スレバ、  
社員ノ増殖迅速ニシテ而シテ戰ヒハ輒チ利ヲ得ル  
ニ至ルベシ、故ニ蟲類ノ中ニ於テ社會ヲナスモ  
ノナル工蜂ノ花粉ヲ集ムル機械及ビ刺針或ハ  
兵蟻ノ大顎ノゴトキハ一社中ニ於テ各自ノ相  
利スル所ナシト雖モ、社外ノモノニ對スレバ無

窮ノ利用アリテ之ヲ得タルハ明カニモ、所謂一  
社會ノ公益トナルモノナリ、然レモ更ニ高等ナ  
ル動物ノ社會ヲナスモノニ至リテハ各自ノ身  
體造構ニ於テ其社會ノ爲間接ノ用ヲ成スモノ  
ナキニアラザレモ、未ダ曾テ一部ノ造構モ純然  
一社會ノ爲ニ變化シタルモノアラズ、夫ノ反嚙  
類ノ角、大猴ノ大牙ノ如キハ其群隊ヲ衛護スル  
ノ用ナキニシモアラズト雖モ、專ラ女子ヲ爭取  
センガ爲獨リ男性ノ稟得シタル兵器ナリト謂  
フベシ、然レモ心力才能ハ大ニソノ趣ヲ異ニセ



其詳細ハ之ヲ第五編ニ述ブベシ所謂心カホ  
能ハ特ニ社會公衆ハ爲賦與スルトコロニ各  
自一己ハ爲ニハタハニ間接ハ利用アルニ過ギ  
ザルモハナリ

人身ノ助ナク守ナキ情態ヲ論ス

爰ニマタ以上ニ述ブル説ヲ駁シ人類ハ此世界  
ニ於テ最モ助ナク守ナキモノニシテ其先未ダ遞  
進セザル日ニ在テハ更ニ甚ダシキ不警衛物ナ  
ラントスル者アリ亞爾日耳侯ノ如キハ蓋シ其  
一人ニシテ口ヲ開ケバ必ズ常ニ人體ノ獸體ニ異

十八百六十  
九年印行古代  
人類論第六十  
六葉

ナル所以ハ身體ノ助ナク守ナキ柔弱ナルニア  
リ即チ此ノ如キ變化ハ所謂天然撰擇ニ歸スベ  
カラザル事件中ノ第一ナルモノナリトイヘリ  
且身體露出ニシテ防禦ナキ事情守衛ノ爲ニ大  
牙爪距ノ欠乏人類ノ柔弱遲緩ナル性質覓食避  
難ノ爲ニ鈍劣ナル臭官等ヲ舉ゲ以テ之ヲ證論  
セリソレ此ノ如クニ求メテ反論セント欲スレ  
バ則チ其短處ナホ一ニシテ盡キズ人類ノ樹木ニ  
急攀シ以テ敵ノ攻撃ヲ防ク能ハザルモ更ニ甚  
ダシキ短處ナリト謂フベシマタ非地人ノ如ク



赤身ニノ氣候ノ嚴酷ナル地方ニ生活スル者アリテ、毛衣ノナキハ暖國ノ人民ニ取リ敢テ大害トナラザルモ、何ゾ短處ナリト謂ハザルヲ得ンヤ、而ルニ人類ノ助ナク守ナキ情態ヲ以テ之ヲ猿類ニ比スルニ彼此其情ヲ異ニセリ、猿類ニ大ナル牙アリ、此牙ハ獨リ男性ニ屬スルト雖モ暢發完全ニメ專ラ敵ト争フノ用ヲ成セリ、但シ其女性ハ之ヲ欠ケリト雖モマタヨク事ニ臨ンテ其生殘スル方法ヲ處シ得ルモノナリ、然リト雖モ人類ハ「シンパンジ」ノ如キ弱小ナ

ル生物ノ後胤ナリヤ、ゴリラノ如キ強大ナルモノ、苗裔ナリヤ未ダ之ヲ審カニセズ、是レ人體ノ大小、膂力ノ強弱ヲ論ズルニ方テ、人類ハ祖先ヨリ強大ナルニ至リシヤ、弱小ナルニ及ビシヤ得テ明言スベカラザル所以ナリ、竊カニ按スルニ軀幹偉大、勢カ強猛ニシテ而シテ、如クヨク自カラ其敵ヲ禦クニ適スルハ、則チ其動物必ズ親睦交際ハ篤キ者トナルト難シ、況ンヤ同情相憐ニ危急相助クルハ如キ高尚ナル心性ヲ稟賦スルニ於テオヤ、是ヲ以テヤ、柔弱ナル生



物ヨリ遞進セシハ人類ハ爲ニ測知スベカラザ  
ル益アリトイフベシ

人類ノ柔弱遲緩及ビ天與ノ兵器ノ欠乏等ハ敢  
テ短處ナリトスベキ所ニアラズ第一之ニ易フ  
ルニ心カノ靈妙ナルヲ以テセリ故ニ未ダ野蠻  
ノ風俗ヲ脱セザルニ似タリト雖モ之ニ由テ自  
カラ兵器要具ヲ調理シヨク天賦ノ短處ヲ補ヘ  
リ試ミニ思ヘ南部亞弗利加ノ如キハ其惡獸ノ  
多キヲ以テ天下ニマタアルマジキ土地ナリ北  
冰洋諸島ノ如キハ生活ノ難キヲ以テ世界ニ比

ビナキ地方ナリ然レビナホ人類中弱小ノ最タ  
ル貌西人ノ如キ者南部亞弗利加ニ生立セリ教  
人義斯基蒙種ノ如キ者北冰洋地方ニ活存セリ  
故ニ人類ハ祖先モ縦ヒ心智ハ量能ト親睦ハ性  
情トヲ以テハ遠ク今日最野ハ蠻民ニ下リシト  
モ樹木ニ攀ル等ハ如キ獸類固有ハ能カヲ失ス  
ルニ隨テ其心カヲ増加スルヲ得バタ生命ヲ  
保存シ隆盛ヲ致サルハ所以ナシ加フルニ人  
類ハ祖先ハ方今ヲハ居處ナル濠斯土刺  
利亞紐及尼若ハ薄爾寧阿ハ如キ或ハ暖和ナ

人祖論卷二 七十二



人祖論卷之二終  
 ナ。ル。ヘ。シ。シ。日。ノ。地。位。ニ。達。セ。シ。ム。ル。ニ。足。リ。シ。モ。ノ。  
 靈。タ。ル。今。日。ノ。地。位。ニ。達。セ。シ。ム。ル。ニ。足。リ。シ。モ。ノ。  
 果。ト。協。合。シ。偶。マ。好。機。ヲ。得。ヨ。ク。人。類。ヲ。萬。物。ノ。  
 ル。天。然。撰。擇。ノ。效。驗。ハ。世。々。遺。傳。シ。タ。ル。習。慣。ノ。結。  
 一。大。地。方。ニ。在。テ。種。族。ト。種。族。ト。相。争。フ。ヨ。リ。致。セ。  
 危。急。ノ。難。ニ。遭。遇。セ。ザ。ル。ベ。シ。而。シ。テ。此。ノ。如。キ。  
 キ。情。態。ハ。遙。カ。ニ。今。日。ノ。蠻。民。ニ。及。バ。ザ。ル。モ。敢。テ。  
 ル。一。大。地。方。ニ。住。居。シ。タ。ラ。ン。ニ。ハ。其。助。ナ。ク。守。テ。

明治十四年六月廿二日版權免許  
 同 七月 出版

長野縣平民  
 翻譯共出版  
 神津專三郎

東京府平民  
 山中市兵衛

發兌書肆  
 同芝區三島町拾番地



